
Dying Lion x Highschool Of The Dead

odenfire

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dying Lion x Highschool Of The Dead

【Nコード】

N4097X

【作者名】

odenfire

【あらすじ】

陸上自衛隊が擁するSOF（Special Operati
on Force：特殊作戦部隊）である特殊作戦群（通称エス部隊）に所属する陸上自衛官・清田武三きよたたくし等陸曹は、歩く人食い死体が闊歩する床主市で極秘任務に従事していた。それは藤美学園に通うある少女の救出任務だった。清田は仲間と共に亡者の溢れ返る地獄と化した学園に突入するが、麻生幾が描くポリティカルスリラー『瀕死のライオン』と『学園黙示録』のクロスオーバーです。麻生幾

作品の他にも個人的に好きな作家の小説もクロスする予定です。二次創作は初めてなので至らぬ所も多々ありますがよろしく願います。ちなみに孝と麗は序盤で退場するので今のところ出番はありませんのでご了承ください。

1 s t d a y ?

清田武二等陸曹は、長い脚を胸の前で抱え、何とかして操縦席のすぐ後の機体両側面の窓に据え付けてある、それぞれのMINIMI軽機関銃に取り付いている二名の機上整備員の間収まるうとして懸命に縮こまっていた。機上整備員達が窮屈そうに身じろぎする度に清田はばつが悪かった。

清田の他には十名の隊員がUH-60JAの兵員室キャビンに乗り込んでおり、全員が重装備に身を包んでいた。清田も例外ではなく、積層セラミックの装甲板を身体の前後に挿入した防弾ベストの上に、武器弾薬を限界まで収納したタクティカルベストを着込んでいた。

ごてごてと大量の装備を身につけているので縮こまるうとしても、ただでさえ大柄な清田が占める容積は大して変わらなかつたが、他の全員も同様なので少しでもそうしないと狭い兵員室には収まり切りそうになかった。

頭に被った空挺仕様の八八式鉄帽と自衛隊迷彩の戦闘服を除けば、清田の格好は一般的な陸上自衛官からすれば考えられないようなものだった。暗視装置を取り付ける為のアタッチメントが前額部に追加された八八式鉄帽を被り、後頭部には赤外線ストロボライトがベルクロ マジックテープ で固定され、両側頭部にはIRライトとフラッシュライトを取り付けてあった。顔は十二番径のダブルオーバックまでなら完全に防弾可能な曇り止め防止のターボファン付きタクティカルゴーグルと、耐火繊維製のフェイスマスクで隙間なく覆われ、その素顔は少しも窺い知れない。プレート挿入式の防弾ベストの上に大量の武器弾薬と装備を携行可能なタクティカルベストを着用し、ベスト下部のループに通した弾帯リストラベルトにもマガジンポーチを兼ねる四個の汎用大型ポーチ、ダンプポーチ、二個のキャンティーンポーチ、バットパックを装着していた。ズボンのBDUベルトからはUSPタクティカルを収納してあるレッグホルスターと数種類

のポーチを装着したレッグパネルを吊り下げており、それぞれ大腿部にファステイクベルトで固定してある。ベストの背面にはキヤメルバックがMOLLEテープで固定され、骨伝導ヘッドセットと咽喉マイクのコードは左脇腹のポケットに収納してある個人用携帯無線機と繋がっている。あまり必要となる機会はないかもしれないが、右脇腹の大型ポーチにはガスマスクを携行している。肘から前腕、膝から脛は防弾素材の防具に覆われ、そして予備の装備や武器弾薬類を可能な限り詰め込んでパンパンに膨らんだデイパックを背負っていた。これは清田がチームの中では一番体格が良く、強靭な足腰を備えているという理由によるものと、主にバックアップを担当しているからであった。

携行している火器も自衛隊正式採用の八九式小銃ではなく、ナイツ・アーマーマーメント社製のRIS Rail Interface System を装備した米国製のM4A1カービンにQDSS - NT4サプレッサー、M203A1グレネードランチャーと室内戦にも対応する為に上部にダットサイトを追加されたACOGサイト、レーザーサイト、フラッシュライトを装備した代物であり、弾倉は通常の三十連箱型弾倉ではなく、百発も装填可能なCマガと呼ばれるドラム型弾倉を装着していた。小銃に装着したサプレッサーは銃声に慣れていない民間人を徒に驚かさないう為だ。派手な銃声によって混乱した素人は何を仕出かすか予測が付かないという理由による。右大腿部のレッグホルスターにはサイレンサーを装着可能なように銃口に擦が切つてある9mmパラベラム弾仕様のUSPタクティカルを収納してあり、ドアブリーチングと制圧火器としての目的を兼ねた、フラッシュライトを装着したレミントン社製の散弾銃銃床折り畳み式M870MCSも携行していた。

清田は一人で戦争をしに行くような格好で、^{ハイクメタル}重武装の復讐者、誰も敵わない無敵の兵士のようなだった。彼の物々しい姿は今回の標準作戦手順(SOP)に則つたものだ。尤も、これほどの武装と装備ですら今起こっている緊急事態に対応出来るか如何かは清田には解

らなかった。手榴弾と弾薬を棘のように身に纏い、分厚い防弾ベストを着込み、灼熱の鉛弾を吐き出す銃火器を握り締め、任務に心臓を高鳴らせている士気の高い隊員が揃っていようとも、この事態は人の手には余るものがあつた。

ドアが開け放たれた兵員室からは、機体の後方に早送り映像の様に高速で過ぎ去っていく床主市の街並を眺める事が出来た。穏やかな春の日だった。陽は既に高く、柔らかな陽光が機内に差し込んでいた。装備を幾重にも重ね着した隊員達にとっては汗ばむ程の陽気だが、臭いを除けば排気ガス混じりの吹き込む強い風が心地好い。UH-60JAの幾らか後方を、大型輸送ヘリのCH-47JAが飛行していた。

清田は、これがよくある春の日の午後の訓練風景としか思えなかった。兵員室を見渡せば、そこにいるのは見慣れた同僚達がいる。皆一様に重装備で身を固め、まるでロボットのようで誰一人として人間染みてはいない。全員が程好く緊張し、程好くリラククスした最高の精神状態にある。防弾繊維の皮膚に隠された五感研ぎ澄まされ、肉体と精神には充分に爆発的なエネルギーを溜め込み、自信に満ち溢れている。そして全員がプロフェッショナルであるという矜持を備えていた。どのような状態（コンディション）の任務でも俺達はやり遂げる、という強い意志を宿した瞳がスモークレンズの下でぎらついているだろう。それは清田にとっては日常の一場面だった。

しかし、眼下の市街地の様子を見ればそれが間違いである事に気が付く。市街地の至る所では煙が立ち上り、交通量の多い道路では事故を起こした車で溢れ返っている。人々は逃げ惑い、戦慄し、暴動が起こり、打ち捨てられた死体も散見された。街のそこかしこが阿鼻叫喚の地獄絵図へと変わり果て、春風に乗って人々の悲鳴が聞こえてくるのではないかと思えた。

一体、日本は、いや、世界はどうなってしまったんだ 不意に胸中にこれからの不安が芽生えたが、清田は直ぐにそれを握り潰し、

頭を任務へと切り替えた。

まずは目の前の事にだけ集中するんだ。それから世界の行く末を案じればいい。尤も、自分一人が案じた所でこの破滅的な出来事をどうにか出来る訳ではない。考えるだけ、心配するだけ無駄だ。

左手首の内側に巻いたカシオ製プロトレック時計に目を遣った。もうそろそろだろう。否応無く高まる緊張を緩めるように清田は少しだけ大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出した。

「降下地点（DOP）を目視した。あと三分だ」

背後から不意に声を掛けられた。班長の須崎輝美すさきてるみ陸曹長だ。須崎は清田の更に後におり、二つの操縦席の間のやや後方から首だけを前に出してパイロットの操縦の邪魔にならないように、操縦席からの状況を観察していたのだ。

清田は指を三本立てて兵員室の隊員達に合図した。清田が合図をしなくても全員が既に承知していた。一斉に機内で小銃の槓桿が引かれ、遊底が弾倉上端の第一弾を啞え込み、薬室へと送り込んで閉鎖される、精密な機構の奏でる小気味よい金属音が唱和した。小銃は眠りから目覚め、安全装置を外せば何時でも撃てる状態だ。小銃の銃身下部に装着してある擲弾発射器、右脇腹にワンポイントスリングで吊るしてある散弾銃、レッグホルスターの拳銃は既に薬室に弾薬が装填されており、安全装置を掛けてあった。清田が全身に身に付けている戦争機械がその時を待ち侘びていた。そして、彼自身もまた、一個の戦争機械としての息衝く瞬間を望んでいた。

いよいよだ。いよいよなんだ。清田は最後の精神統一として目を閉じ、鼻から息をすつと吐き、そして再び目を開いた。

兵員室の開け放たれたドアから望めたのは、学校のただっ広いグラウンドだった。そこでは高校生と思しき生徒達が逃げ回っており、そして逃げ遅れた何人かは、清田はその惨劇から思わず目を逸らした。

唐突に機体が右に傾いた。清田は機体の進行方向に背を向けて座っている。機体は正確には左に傾いていた。そしてそのまま機体は降下せず、左に緩やかに旋回して学校上空を飛行した。

校舎の屋上には両端に出入り口の建物が大小二つあり、その間はかなり広い空間となっている。大型の双発ヘリコプターである、後続のCH-47JAでも何とか着陸可能だろう。尤も、接触するほどの高さがないとはいえ、転落防止用のフェンスがローターの回転範囲内にあり、普通、接触の危険性が少しでもあればその時点で着陸するべきではないが、今はそのような悠長な事は言っていられない。加えて、特定建築物に指定されている学校建築物は耐震性の面からかなり頑丈に設計されているものだが、流石に屋上に軍用ヘリコプターの着陸を想定している訳ではない。十トンを優に超える機体そのまま着陸をすれば、その重さに耐え切れずに屋上が崩落する可能性は充分にある。故に着陸は、屋上に完全に重量を掛けないで、ローターを回転させたまま抜重した状態である必要があるだろう。無論、そうやって留まっているだけで燃料を大量に消費し、神経をすり減らしながら機体を操るパイロットの負担は倍加する。

小さな方はその上部構造にドーム状の屋根を持つ小さな施設が建てられており、階段で昇る事が出来るようだった。ブリーフィングにあつた通り、あれが天文台なのだろう。有名私立校らしく、施設は充実しているようだ。だが、その階段には今は長机のバリケードが設置されており、天文台への出入りは封鎖されていた。須崎もそのバリケードの存在には気付いている様子で、兵員室の左側の出入り口にいる隊員によく観察するように命じた。隊員は小型双眼鏡をコーディネートし、封鎖された天文台に向けた。そして直ぐに三名の生存者の姿を発見し、須崎に報告した。

須崎はパイロットと何やらやり取りをし始めたが、頭上で連続出力一六六二馬力のT700-IHI-401Cエンジンが二基も唸りを上げていれば聞き耳を立てても聞く事は出来ない。やがて骨伝導ヘッドセットを通じて全員に須崎の声が聞こえてきた。

「DOPに複数の脅威が確認された。それを排除しない限り、着陸は出来ない」

須崎は兵員室後部の左側にドアガンとして据え付けられている、ブローニングM2重機関銃の傍にいた隊員に目配せをした。隊員は重機関銃の重い槓桿を素早く引き、金属弾帯ヘルリンク式の一二・七mm×九九徹甲榴弾を薬室に送り込んだ。小銃のそれとは比べものにならないほど重厚な金属音が機内に響き渡った。

「校舎の傍まで高度を下げ、ドアガンで屋上を掃射し、脅威を排除した後に着陸する」

須崎がパイロットに高度を下げるように指示すると、UH-60JAのローターが軋むような音を立てて高度が緩やかに下がり始めた。緩やかとはいえ、それはエレベーターよりもずっと早く乱暴に降下したので、清田は臓腑が落ち込む様な感覚を味わった。やがて機体は左側面を晒して校舎に横付けするようにしてホヴァリング飛行に移った。

兵員室からは屋上を若干見下ろす形となっていた。そこで漸く、清田は屋上で徘徊する脅威の姿を仔細に見て取れた。清田はその惨たらしい異形の姿に思わず息を呑み、瞳孔が広がるのを感じた。

彼らはこの学校の生徒だった。彼らの誰もが、身体の何処かを大型の肉食獣に噛みちぎられたかのような酷い重傷を負っていた。中には破れた腹腔から内臓が零れ落ちている生徒もいたが、まるで気にした様子も無く、虚ろな表情のまま内臓を引きずり歩き、屋上に血糊をべったりと付着させていた。点々と落ちている赤黒い肉片は、恐らくその生徒の落とし物だろう。かつては自身の生命を駆動させた重要な部品だが、今となっては必要ないので全く気にしている様子は無かった。

彼らは人間ではなかった。それどころか既に死亡している。しかし、現実には彼らは歩き回っていた。生命の永久不変の真理を超越して、死者が動き、更に彼らは死んでいてそうする必要が皆無であるにも関わらず、生者の血肉を求めて彷徨していた。

清田には性質の悪い冗談としか思えなかったが、これが紛れも無い現実なのだ。世界は、今日という日を境に全く別の悍ましい何かへと変貌を遂げていたのだ。

だが、世の中を人食いゾンビが闊歩しようとも自分達のやる事には変わりはない。それだけは間違いなく確信に足り得る事実だ。清田を含めたこの場にいる全員がそう心得ていた。だからこそ、恐慌をきたすことなく、冷静に己の職務を果たそうと全力を尽くせた。やるべき事を心得てさえいれば、訓練と同じように出来る。

「よし…制圧しろ」

須崎が射撃命令を下した。重機関銃を操作する隊員は、既に安全装置を切り、手近な生徒に照準を合わせていた。その命令と同時に、隊員はM2重機関銃のバタフライトリガーを両手の親指で押し込んだ。直後、置針の如く太く頑丈な撃針が、薬室に収まる重機関銃弾の雷管を叩いた。

砲声と何ら遜色のない、腹の奥底を震わせる鈍い響きと共に、重い銃声が咆哮した。その発砲音は削岩機のように重く、ずしりとくるものだった。音速の約四倍という初速で撃ち出された大口徑重機関銃弾は、文字通り人体を真っ二つに引き裂き、そして瞬時に炸裂した。脆弱な有機質の塊を粉碎するには途方もない運動エネルギーだけで充分過ぎたが、弾頭に僅かながら充填された炸薬が更に拍車を掛ける。たった一発でも殺し過ぎ（オーバーキル）な威力の徹甲榴弾が数発、？元生徒？を一瞬で原形を留めぬほど破壊し尽くした。清田は、？元生徒？の肉体が挽き肉と血飛沫に変わる一部始終を見て、絶対にこの化け物みたいな重機関銃に撃たれたくはないと思っ

た。

次々と短い連射を放つと、マジックペンほどもある巨大な空薬莖が幾つも硝煙を燻らせながら兵員室の床に転がった。排莖口から焼け付いた薬莖が弾き出される度に、屋上に挽き肉と血飛沫が飛散する。絶対的な破壊に彼らは無頓着で、そもそも既に死んでいるので自身の新たな死には関心がないのかもしれない、むしろエンジンとローターが撒き散らす爆音に引き寄せられるようにして彼らは屋上の縁に近付いてくるので、操作の難しいM2重機関銃でも簡単に命中弾を送り込む事が出来た。

あつという間に屋上の脅威は全て排除され、代わりに目に見えない巨大なミキサで粉碎するされたかのような肉塊がそこいらに散らばっているだけだ。肉片の焦げ付いた臭いに思わず清田の胃がすぼまった。

須崎がパイロットに脅威が完全に排除された事を伝えると機体はそのままホヴァリングしながら横滑りし、やがて屋上へと着陸しようとする。ファストロープによる懸垂降下は実施しなかった。その方法による展開は確かに迅速だが、機外に垂らしたロープを切り離すか引つ張り込む必要がある為、どうしても機体の離脱に多少の間隔がかかってしまう。また、ロープを切り離した場合、後続のCH-47JAが屋上に着陸する際にそれが邪魔となる可能性があり、無用な事故を引き起こすかもしれない。また、ファストロープは使い捨てるには勿体無い器材であり、この状況下ではいつ補給されるかも分からないし、切り捨てたロープを回収する暇があるとも限らない。それら諸々の理由を鑑みて、清田達は機体が屋上からメートル弱ほどの高さで静止すると次々と飛び降りた。その方法が現在では最も簡便なものだった。

最後に班長の須崎が機内に誰も忘れ物をしていないのを確認してから飛び降りた。UH-60JAは屋上に完全に着陸する事なく、隊員達を降ろすと直ぐに甲高い唸り声を上げて急上昇し、上空を旋回し始めた。

屋上に降り立った隊員達は直ぐに放射状に展開し、全周を警戒した。清田は屋上にある二つの出入り口のうち、上部構造にドーム状の屋根のある建物の方に展開し、片膝を着いて周囲を観察していた。まだ作戦は始まったばかりだが、清田は不思議とすっかり落ち着いていて自分の少し驚いていた。渴望していた実戦がこんな形で実現した事も奇妙だったが、自分の感慨よりも今は任務に集中すると自らに言い聞かせた。そうしなければ、目の前に転がる、胸から上だけになっても動き続ける？元生徒？の肉塊に心が碎けてしまいうだった。その肉塊は、虚ろな目で清田を見詰め、口をパクパクとさせていた。声を絞り出そうとしても、横隔膜と呼吸器系は全てがズスタに引き裂かれ、身体の裂け目からは肉の切れ端がビラビラとはみだしていた。思わず、熱い塊が食道までせり上がって来たがなんとか堪え、飲み下した。胃液の苦さと食道の焼けるような感覚と、これから先、何度も吐き気を堪えなければならない場面に遭遇するのかと思うと気が滅入った。

「当初の予定通り、清田、浜本の両名はDOPの確保及びへりの誘導。残りは二個強襲班に別れて対象の搜索を行う」

全員が素早く、且つ統制された動きで行動した。清田は吐き気を堪えながら、マンパック型の携帯無線機を背負った通信担当の浜本はまもと勝昭かつあき二等陸曹と共に屋上に残り、その他の隊員は須崎に率いられて四名編成の二個班に別れ、屋上の二つの出入り口からそれぞれ屋内に突入した。

「清田、お前は天文台の生存者の様子を調べて来い。俺はへりの誘導をする」

浜本は清田に指示を下すと、背負った携帯無線機に繋がったインターコムに向かって上空で待機するCH-47JAのパイロットと

連絡を取り始めた。

「了解」

清田は片膝から立ち上がるとローレディの銃姿勢で天文台へと駆け寄り、階段を一気に駆け上がった。動く度に胃が悶え、胃液臭いげっぷが出そうになった。だから清田は、終始歯を固く喰い縛らねばならなかった。

バリケードの長機の机板の表面は、血が付着し、引つ掻き傷も刻まれていた。ヘリで上空を旋回中、人食い死体と化した生徒達が立て籠もる生存者の生肉にありつこうと群がっていたのは確認していた。清田は小銃を水平に据銃し、しっかりと銃床を肩付けしてダットサイトを通して照準し、バリケードの隙間から中の様子を窺ったが、生存者達の姿は見えない。直ぐ右に折れた通路の先、天文台の陰にいるのだろう。だが、何やら言い争う声は聞こえた。それは逼迫しており、生存者達が急を要する事態にある事は簡単に察せられた。

「自衛隊です！ 救助に来ました！ 今すぐバリケードを退かして下さい！」

そう怒鳴ったが、彼らは清田に構わず、言い争いを止める気配はない。強行手段を取らざるを得ない、と清田は逡巡する事なく決断を下した。

「こちらからバリケードを破ります！」

清田はそう警告を発してから、渾身の力を込めて長機に前蹴りを放った。この程度のバリケードを破るのに、ワンポイントスリングで何時でもすぐに使えるように右脇腹に吊り下げている散弾銃を使

う必要はなかった。頑丈なタクティカルブーツの一撃は、脆い合板の机板に大穴を穿ち、アルミ材の骨組を何本もへし折った。しかし一撃では壊れず、何度か蹴り、最終的には強烈な体当たりを打ち嘔ましたが、それでもバリケードの粉碎に到らなかった。注意深く観察すると、長机の脚と手摺りがセロテープでがっちり固定されていた。清田は刀身が分厚く長い、ストライダーナイフを鞘から抜き、テープを切ると再度体当たりをしてバリケードを吹っ飛ばした。派手な音と共にバリケードとなって出入り口を封鎖していた長机や椅子が吹っ飛び、清田は天文台へと足を踏み入れ、油断なく小銃を構えたまま通路を右に曲がり、生存者達の言い争いの場に踏み込んだ。

男子生徒が一名、血の気の失せた顔で力無く手足を投げ出して仰向けになって横たわっていた。顔を横に向け、顔面の穴という穴から血が流れ出ており、それが顔の傍でどす黒い血溜まりを作っていた。

既に手遅れだ 男子生徒の様子を一目見るなり、清田はそう判断した。その特有の症状から、彼は発見するよりも前に感染者に嘔まされており、屋上に降下する間に死亡したと見て間違いないだろう。程なくして彼は生者の血肉を求めてさまよう亡者となって蘇る。今すぐにも処理しなければならぬ。

他には、手に金属バットを持った男子生徒と、彼に縋り付きながら何事かを必死に訴える女子生徒がいた。最初に清田の存在に気付いたのはその男子生徒だった。顔を上げ、清田の姿を見ると少し戸惑ったような表情を浮かべていた。自衛隊員が救助にきて、安堵しているという訳ではなさそうだ。少し遅れて、女子生徒も振り返り、清田の存在を認識していた。

「自衛隊です！ 救助に来ました！ 直ぐにその彼から離れなさい！」

清田は声を張り上げて警告し、既に死亡している男子生徒の頭部に小銃の狙いを定め、引き金に指を掛けていた。ぐつと指に力を込める際、清田は、これから自分が行う事がどれだけ今後の自身の人生に陰を落とすのか、少しも考えない訳ではなかった。

「だめえっ！ そんな事しちゃだめっ！！」

何を思ったのか突然、女子生徒が身を翻して清田に駆け寄り、死亡した男子生徒との間に立ち塞がって射線を遮りつつ、小銃を撃たせまいと彼に飛び着いてきた。余りにも突拍子のない女子生徒の行動に、清田は反応できずに硬直していた。

「ならないわ！ 永はく奴らくなんかにならない！！ だからやめてえええええ！！！」

清田の小銃に縋り付き、女子生徒は金切り声でそう訴えた。恐らく、死亡した男子生徒とは仲が良かったのだろう。それ故に彼女は銃口の前に躊躇なく立ちはだかり、暴発の危険も辞さない覚悟で小銃に抱き着くという狂行に及んだのだ。清田は暴発させないように咄嗟に親指で安全装置を掛けるので精一杯だった。

「君！ 離れなさい！ 危ないから今すぐ離れるんだ！」

清田は何とかして女子生徒を引き剥がそうとするが、その細く小さな身体の何処にあるのか、彼女は恐ろしいほどの力で小銃から離れまいと必死にしがみついていた。いやいやと頭を振り、泣きながら清田に抵抗していた。一般の想像と違い、こういった事態が生起すれば特殊部隊員は優しく抱き締めるなどという事はしない。銃器に組み付かれる前に突き放せと教えられており、清田もそう教わっていたが、これが男であるならば容赦なく殴り飛ばしている所だが、

相手は清田よりもずっと小柄な女の子である。清田が本気で突き飛ばしたり殴り飛ばしたりすれば怪我は免れないし、彼自身もか弱い女性に暴力を振るう意志は無かった。それを今は後悔していた。

「麗！ 止める！ 止めるんだ！！」

金属バットを手にしていた男子生徒が駆け寄り、麗と呼んだ女子生徒を背後から羽交い締めにし、清田の手助けをする。男二人掛かりでも女子生徒をなかなか引き剥がせず、彼女は目茶苦茶に手足を振り回して抵抗した。途中、清田は何度も脛を爪先で思い切り蹴られたが、脚に装着している防弾レガースのお陰で痛みは無かった。

しかし多勢に無勢であり、膂力と体格で劣る男二人には勝てず、やがて女子生徒は引き剥がされ、男子生徒に羽交い締めに使われたまま隅に強引に引つ張られていった。

男子生徒は清田と目を合わせ、頷いた。清田は無言で頷き返し、小銃に異常がない事を確かめてから据銃し、男子生徒の死体に狙いを定めた。それとほぼ同時に、今までぴくりとも動かなかった男子生徒の死体が、油の切れた機械のようなぎこちなさで、むくりと起き上がった。

蘇生したのではない。男子生徒は依然として死んだままだ。完全に血の気の失せた顔は青白く、白目を剥いた目はあらゆる方向を見ている。だらんと垂れ下がった腕を力無く持ち上げ、夢遊病者の如く覚束ない足取りで歩む。だらしなく開かれた口からは血と唾液の混じった液体を垂れ流し、喉からは呻き声ともつかぬ音を発していた。ACOGサイトの照準十字線レティクルの中心に、男子生徒の顔を真正面から捉える。サイトの中心で交差した十字線は、男子生徒の唇と鼻の間に重なった。そこを撃てば、回転する弾丸が貫通する際に肉と神経を巻き込んでいき、頭蓋骨内に空洞が生じる。脳は堅牢な頭蓋骨に保護されているが、目の下の奥に突如空洞が出現すると、脳幹や運動中枢がそこへ落ち込んで破壊され、一瞬にして無力化できる。

尤も、音速を遙かに超える小銃弾を頭部に撃ち込まれば、密閉された頭蓋骨で空洞現象が生じ、瞬時に生じた強大な圧力を解放するには“爆裂”するより他に方法はない。つまり頭の何処を撃とうと即死や重傷は確実だ。

男子生徒の白目を剥いた目からは血が流れていた。清田にはそれが、悍ましい己の死後の姿に涙を流しているようにも思えた。唯一自分に出来るのは、これ以上彼の遺志を離れて暴走する彼の肉体を物理的に破壊し、その死を冒瀆させない事だけだ。

清田は引き金を優しく、朝霜が降りるが如く柔らかく引いた。引き金を引く力を誤ればその瞬間に照準が狂い、標的を撃ち漏らす可能性がある。だから、清田は引き金を優しく引くように心がけていた。心の中では既に踏ん切りがついていた。このちっぽけな金属の部品を指先で僅かに動かせば、もう二度と元の自分には戻れない事を承知していた。

耳を聳する派手な銃声はサウンドプレッサーによって聞こえなかった。代わりに、僅かに空気が漏れ出る音と遊底の作動音がしただけだ。清田には音速を超える小銃弾で男子生徒の頭部の爆ぜる様子がサイトを通して鮮明に、まるでスローモーション映像のように見て取れた。それはほんの一瞬の出来事だった。だから、隅にいた二人は顔を背ける事も出来ず、親しい人物の頭が爆裂する瞬間を目の当たりにしてしまった。

二人とも何が起こったのか理解出来ないでいたが、グズグズに崩れた頭の残骸を乗せただけの男子生徒の身体が、やがて糸の切れた操り人形のように頹れ、重く湿った音と共にコンクリートに叩き付けられてから初めて、彼らの時間は動き出した。

「いやあああああつ！！！」

女子生徒が、魂が引き裂かれたかのような、悲痛な叫び声を上げた。男子生徒はもう彼女を羽交い締めにしていなかった。彼もまた、

目の前の衝撃的な出来事に茫然としていたのだ。恐らく、映画やドラマのように、人間の頭は撃たれても綺麗に原型を留めるものばかり思っていたのだろう。

清田は銃口から硝煙を燻らせる小銃をゆっくりと下ろし、足元に転がる、少しの顔の皮膚と下顎を残しただけの男子生徒の死体を眺めた。血と肉と骨と脳漿と、幾らかの歯が散らばっている。殺したのではない。清田はあくまでも“動く死体”を撃つたに過ぎない。しかし、初めて“人間”を撃つたという事実もまた真実だった。ほんの少しの間、清田はその事実を受け止め切れずにいた。そして、人間の遺体を損壊してしまった事に罪悪感を抱いていた。

だからだろう。男子生徒の拘束を解かれた女子生徒が、恐ろしい形相で殴り掛かってきたのに対して全く反応できなかった。

「なんで、なんで！！ 止めてって言ったのにつ！！ どうして撃つたの！？」

何度も何度も、女子生徒は握り締めた拳を振りかぶって清田の胸に叩き付けた。女子生徒の殴打は全く清田に痛みを与えなかった。装備を詰め込んだタクティカルベストと、防弾ベストの分厚い装甲板が女子生徒の小さな拳の全てを受け止めていた。清田は暫く、されるがままでいた。女子生徒は涙を流しながら清田を罵り、拳に血が滲んでも殴打を止めなかった。

「私は……私は助けてなんか欲しくなかった！！ 永のこんな姿なんて見たくなかった！！ こんな風にして生き残るぐらいなら私も永に噛まれて、私もく奴ら>になりたかったのに！！」

いつの間にか、女子生徒の背後に男子生徒が立っていた。

「止めるんだ、麗」

男子生徒は振りかぶられた女子生徒の手を掴んだ。そうして漸く、彼女は清田に拳を叩き付けるのを止め、嗚咽を漏らしながら肩で荒い息をついた。しかし、涙に濡れたその瞳は依然として清田を厳しく睨み付けていた。

「この人が撃たなければ麗が喰われていた……それに、奴がそれを望んだとは思えない」

そう諭すように男子生徒は静かに言い、女子生徒の肩に手を置いた。

「孝に…孝に何が分かるっていうの？」

しかし、彼女は肩に置かれたその手を乱暴に振り払い、静かに、だが、強い怒りを含めた声で言い、やがて再び感情を爆発させた。清田の次に、今度は彼を睨みつけるその瞳には憎悪の炎が燃えていた。まるでこうなった原因の全ては彼の所為とでも言うかのように。今の彼女は、悲しみで何ら分別のつかない状態にあった。

「そうだわ、そうだったのね！ 孝は、本当は永の事を嫌っていたのね！！」

そして、全てを見透かしたと勘違いし、一人で勝手に納得し、侮蔑を表わにした表情で言った。

「私と付き合っていたから！！」

直後、乾いた音が響いた。男子生徒 孝 が、振りかぶった手で女子生徒 麗 の頬を平手打ちしたのだ。麗は、打たれて赤くなっ

た頬を押さえ、暫し茫然と立ち尽くしていた。そして見た。孝は無言で涙を流していた。彼もまた、二人にとって掛け替えのない人を目の前で亡くし、その如何する事も出来ない深い悲しみとやり場のない怒りを、誰に向けるでもなく、ただひたすらに堪えていたのだ。麗はそうして初めて気付いた。周囲を顧みずに当たり散らした自分の身勝手さと、目の前で親友を失ったばかりの孝に浴びせた心ない言葉がどれだけ残酷な仕打ちだったのかを。

「ああ…私、なんてことを…ごめんなさい、ごめんなさい……」

か細い肩を震わせ、涙と嗚咽混じりで、自分が犯した過ちの重大さと残酷さに対して、麗は謝る事しか出来なかった。孝は、何も言わず、震える彼女の肩に腕を回し、無言で強く抱きしめた。暫くそうつやうなされるがままだったが、やがて麗もそれに応え、彼の腰に腕を回して抱き締め返した。少年と少女は、そうしてお互いの体温を共有する事で、慰め合うしかなかった。でなければ、余りにも残酷過ぎる現実に二人は忽ちの内に打ちのめされ、もう二度と立ち上がる事が出来ないだろうから。生き残ったからには彼らは死んだ者達の間も生きなければならぬ。それは苛酷な運命だが、今はその現実を暫し忘れる必要があった。

清田は声を掛けようと思ったが、思い止まり、やがて背を向けて天文台を後にした。彼らはまだ子供なのだ。肉体は大人と遜色ないかもしれないが、精神までもが成熟しきっている訳ではない。あれこれと部外者の、それも仕方がなかったとはいえ彼らの目の前で清田は親しい人の頭を吹っ飛ばしたのだ。何も言わずにそっとしておいた方がいいだろうし、彼らもそう望んでいるだろう。

天文台へと続く階段を下りた所で、頭上から爆音が降り注いできた。見上げれば、CH-47J Aのずんぐりとした巨体が陽光を遮って降下している真つ最中だった。やがてエンジンとローターの轟音が一際大きくなり、吹き降ろしの風が強まった。ほぼ開かれた状

態の、機体後部の斜路扉ランプドアに腹這いになって、着陸する屋上の様子をパイロットに伝えていた機上輸送員ロードマスターの姿が見えた。機体は、浜本の誘導と、よく訓練された乗員一同の高い技量により、その巨体からすれば充分とはいえない広さの屋上に、何事もなく着陸する事が出来た。直ぐに斜路扉が完全に開かれ、特殊作戦群の衛生担当を務める正岡智於二等陸曹と村田秀久二等陸曹まはるかともひろが降りてきた。衛生担当とはいえ彼らは他の者と変わらぬ重装備を身に付け、スリングベルトで身体の前にカスタムメイドのM4カービンをぶら下げている。正岡は足早に清田の方へ駆け寄り、彼の耳の真横で怒鳴った。そうしなければエンジンとローターを稼動させたままの機体の傍では会話が成り立たないからだ。

「生存者は!?!」

「生存者は二名! うち一名は既に死亡していたので処置しました!」

清田も負けじと声を張り上げた。

「噛まれているのか!?!」

「自分が確認した限りでは見当たりませんでした!」

「何処にいる!?!」

「天文台に! しかし二名とも心的ショック状態にあります!」

「解った!」

正岡は、背中に大量の医療器材を詰め込んだメディカルバッグを

背負ったまま、天文台の方に駆けていった。経験豊富な正岡に任せれば何も問題は無いだろう。

「清田！ 配置につけ！ 1（強襲第一班）がお前の方の出入り口から生存者を連れて来る！」

一息つく隙もなく、浜本が傍にやって来て耳元で怒鳴った。

「誰が来るんです!?!」

「イシさんが女の子を二人連れて来る！ 感染の有無は既に確認されている！ いけ！」

浜本は清田にそう伝えたと、機上輸送係のところに行って同様の事を伝えた。機上輸送係の一人がCH-47JAの機体左側の窓にドアガンとして据え付けられている74式車載機関銃に取り付いた。清田は、いざとなったら強力な弾幕で援護してくれるドアガンの射線に入らないようにして屋上への出入り口を狙い易い場所に移動し、防弾レガースに覆われている右膝を地面につけ、右足の上に尻を置き、立てた左膝の上に左肘を載せ、左手で擲弾発射筒を装着した小銃を支え、握把を右手の親指と人差し指以外の指で握り締め、肩に引き付けるようにして固定した。この体勢ならば何時間でも照準をつけられる自信が清田にはあった。

「タケ、タケ。こちらロック。もう出入り口に到着する。撃つなよ！」

骨伝導ヘッドセットから白石鉄男^{しらいそ}二等陸曹の声が直接、頭蓋骨内に響いた。

個人のコールサインは二音か三音と決められ、殆どの隊員は自分の姓名の一部を取っていた。但し、聞き取り易い事と、通信に使われる符丁やアルファベットや数字などと紛らわしくない事が優先される。清田は名前である武のタケ、白石は苗字の石を英訳のロックで呼んでいた。

『こちらタケ。了』

清田がそう応えてから暫くすると、清田並みかそれ以上に立派な体格を持つ白石が、二人の女子生徒を先導するようにして出入り口に現れた。二人とも顔面蒼白で、お互いの肩を抱いてガタガタと酷く震えている。歩くのもやっとといった状態で、つい先程まで想像を絶する惨劇の渦中にいた事は容易に察せられた。屋上に到着すると二人は腰から砕けるようにしてその場に座り込んでしまった。白石は直ぐに二人の異変に気付き、引き返して抱き起こそうとしたが流石に一人では無理だった。

「清田！ 手伝ってくれ！」

白石が言うよりも早く清田は駆け出していた。そこで漸く、清田は装備と武器と弾薬を身に帯びているのに速く走れる事に気が付き、驚いた。様々なオプションを装着したコルトM4カービンは嵩張るし、ただでさえ普段よりも重装備なのだ。完全武装と装備を身に付けると、幾ら鍛え込んでいるとはいえ重力が倍になったように感じる。だが、女子生徒に駆け寄った時、両足がほんの少し痺れた程度で、後は何とも無かったので清田はおやつと思った。興奮と恐怖で脳内麻薬が過剰分泌されているせいだろうと思い、今の自分を超然とした気持ちで受け止める事にした。

未だに腰を抜かしている女子生徒に駆け寄ると、清田を見て明らかに困惑と恐怖の表情を浮かべていた。小柄な彼女達からすれば清

田と白石は恐ろしいほどの巨漢で、しかも重装備を身に付けているので殊更に大きく見える。鉄帽とスモークレンズのタクティカルゴーグル、フェイスマスクで表情は一切窺えず、まるでロボットのように欠片も人間らしさがないのだ。そんな敵つい野郎どもに囲まれて平静でいられる女子高生は、日本の何処を探してもいないだろう。

しかし清田はいちいちそのような反応に取り合う事もなく、片手で女子生徒を軽々と抱き抱えると白石と共に機体の後部へ走った。普段から重量物に慣れ親しんでいる彼からすれば、小柄な女の子など子猫とさほど変わらないぐらいに軽く感じられた。後部の斜路扉から機内に入ると、既に先程救出した孝と麗が乗り込んでおり、正岡が二人の面倒を見ていた。一瞬、清田は孝と目が合い、気まずい思いをしたが、直ぐに抱えていた女子生徒を降ろすと自分のやるべき仕事に戻った。恐らく、この先何度もそういった事態に直面する事があるだろう。今のうちから慣れておくべきだ。慣れれば、何事も上手くいくよう出来る事は様々な訓練で嫌という程学んでいる。

「イシさん！」

清田は機体の外に出ると白石に声を掛けた。

「中の状況はどうなんですか?!」

「酷いもんだ! そこら中が動く死体と肉片と血溜まりで足の踏み場も無い…本当にクソな事態だ!!」

タフで狂った野郎どもの中でも、一際タフでイカれている白石が疲労を滲ませた声で言った。彼も相当堪えている様子だ。

「見てみる! 靴底にこんなのが挟まっていやがった!」

白石は足を上げて靴底に挟まっていた物を清田に見せた。それは紛れもなく、人間の指だった。大きさと形からして小指だろう。白魚のようなその小指の爪は綺麗に整えられ、可愛いネイルアートが施されているので女子生徒のものと知れた。

「何かしら人間の部品を踏むといった有様だ！ 安っぽいスプラッター映画じゃねえんだぞ畜生が！！！」

忌ま忌ましそうに吐き捨てると、白石は挟まっていた小指を剥がして投げ捨てた。

「こんな有様で<目標>が生きているとは思えないぜ！ 一体今回の任務は何の目的があるんだ！？」

任務に不平を零すとは、普段の白石らしくはなかった。

事の始まりが何であるのかは知らない。いや、知る必要がないというべきでもあるし、清田はそんな事に興味は無かった。重要なのは、求められた時に、求められる能力を最大限に発揮し、課せられた任務を完璧にこなす事だけだ。そして今はその求められた時がほんの数時間前に発生し、今に至ったに過ぎない。

全国的に発生した殺人病の蔓延による混乱を收拾する為に、自衛隊は内閣総理大臣の出動要請が下されるよりも前に超法規的措置により行動を開始していた。特にその中でも真っ先に行動したのが、清田が所属する自衛隊創隊以来、史上初となる特殊作戦部隊である特殊作戦群だった。

唯一、自衛隊内で卓越したミリタリーの知識と技能を使う事の出る政治的作戦部隊である特殊作戦群は、単に戦術的に事態に対処するのではなく、政治の求めに応じて？情勢？に対応する柔軟な運用思想によって設立された戦略部隊である。初動対処として国内の特に重要な拠点 港湾施設、発電所、上下水道等の近代都市の生活

基盤を支えるのに必要不可欠なインフラの確保の任務を予め与えられており、部隊は迅速に展開しこの任務を遂行し、確保した拠点の維持を一般部隊に任せて次の拠点に向かうという事を繰り返していた。

それは此処、床主市でも同様の任務が行われていた。床主市の電力の大半が、床主市より北の山中にある奥名湖の水力発電所で作られており、その施設の維持の為に特殊作戦群の一部が投入されていたが、清田が所属する班は別の任務を与えられていた。それは特殊作戦部隊にとっては当たり前と言っても過言ではない、人質救出作戦だった。尤も、こんな全世界的な非常事態に於いて人質を取って立て籠もる暢気なテロリストがいる筈もなく、仮にいたとしても警察や自衛隊は蔓延する殺人病の感染者とそれらから逃げ惑う市民或いは暴徒の対処で忙しいので、無視されるのがオチだろう。

人質救出というよりも、殺人病感染者という暴徒の中から対象を助け出さなければいけないので、人命救助というべきだろうか。しかも特定の人物を怪物で溢れ返った街から救助しなければいけないので、困難な任務である事は容易に想像出来たが、そういった無理難題とも思える任務を遂行するのが特殊作戦群である。何故なら、政治からのオーダーによつて出動する事を望む特殊作戦群には、常に様々なコンディションが与えられるからだ。例えば、海外で人質となった邦人を敵を殺さずに救出せよ、国際紛争に於いて軍事力を一切行使せずに政治的混乱を引き起こす事によつて解決せよ、国内に潜む重武装した秘密工作員を発見し隠密裏に制圧せよ、第三国のミサイル計画そのものを根底から排除せよ、いずれも外交、警察の能力を超え、しかも自衛隊の一般部隊の出動は政治的に不可能だがそれでも解決しなければいけない等といったように、命じられるコンディションとその任務は複雑怪奇である。そして特殊作戦群はその困難なミッションを完遂する能力を求められており、実際にその能力を備えている。

清田はズボンのポケットから一枚の写真を取り出した。写っ

るのは一人の少女だった。整った顔立ちは美少女といっても過言ではなく、長い髪をツインテールにしている。洒落たデザインの眼鏡のレンズ越しの瞳に宿る意思是気が強そうで、ツンと澄ました様子が似合っていた。写真を見なくても清田は、ファルコン・ビューと呼ばれる特殊作戦部隊として必要な技能によって写真の少女を記憶に完全に刻み込んでいたが、特殊作戦群の群長である剣崎^{けんざき}巖^{いわ}一等陸佐が念の為に持って行けと言うので清田は黙って写真をポケットに滑り込ませた。

今思えば、作戦室でのブリーフィング時の剣崎の様子は何時もと違うように思えた。殆ど迷彩ズボンの上に質素な速乾性生地の上着を着たヤツ。しかも数人の厳つい野郎どもの集合写真がプリントされた信じ難いデザインの。という格好の剣崎は、年齢よりも若く見え、広い肩幅、発達した上腕、適度に刈り込んだ短い髪、そして全てを見透かすような瞳の持ち主であり、常に表情を変える事もなく、恐ろしいまでに静かな男だ。米陸軍『JFK・スペシャルフォースセンター&スクール(特殊作戦部隊養成学校)』で長期間に及ぶ厳しい訓練を積み、韓国、オーストラリア、ドイツ、イギリスの特殊作戦部隊(SOF)に於いて特殊作戦戦術の深淵をどっぷりと体験し、トップレベルの特殊作戦のイメージまでも全て頭に叩き込んでいるという?狂った?男でもある。その、いつ何時も動じぬ狂った鋼の男である剣崎は、全世界的な異常事態に対しても冷静に淡々と行動し、初動対処行動を命令していた。その剣崎がプロジェクターからスクリーンに映し出された少女を前にして、その鉄面皮が少しばかり焦っているように見えたのは決して気のせいではなかった筈だ。

この少女は床主市の藤美学園に通う高校生だ。

名前は高城沙耶。年齢は十六歳。

お前らに与える任務はこの少女の救出だ。

ミリタリーの使用? 存分に使え。

任務の完遂に必要と思われるものは躊躇わず使え。

しかし最低限の隠密性サイレントは維持しろ。

忘れるな。

お前達は影の部隊だ。シャドウズ

その存在は今もなんら変わる事はない

清田は写真をポケットに仕舞い、暫し物思いに耽った。この任務は明らかに異常だ。重要な人物とも思えない、一人の少女を救出する為に航空機を含む完全装備の特殊作戦群一個分隊が投入されるなんて。誰かの私情が挟まれているのは明白だ。それが剣崎のものであるのか、それともそれ以外の誰かのものであるのかは分からないが、特殊作戦群が動くという事は政治のトップが直接オーダーを寄越したという事でもある。しかし任務の内容に疑問を感じる事があつてもプロフェッショナルである以上、清田やその他の隊員がその程度で任務を疎かにする訳ではない。任務遂行の為であるならば死さえも厭わないのが俺達だ、と清田は自負していた。

「イシさん！ 清田！ 今度は強襲第二班（2）が団体を連れて来る！ 強襲第一班（1）も一度引き揚げて来るぞ！」

浜本がそう叫ぶように言った直後、白石が女子生徒達を連れて来た出入り口から黒木順次くろきじゆんじ一等陸曹を先頭に、2の隊員達に周囲を守られた生存者の一団が現れた。十人以上はいるだろう。CH-47JAの兵員室にまだ余裕はあるが、この調子で目標以外の救助を続けなければいずれば満員になる。尤も、満員になるほどの生存者がいるかは分からないが。少し遅れて須崎を先頭にして1も到着した。清田と白石は生存者の一団に駆け寄り、命からがら逃げ延び、疲労困憊している者へは肩を貸したり、励ましたりして機体まで連れていった。

「貴方達が来てくれなければ今頃どうなっていたか…生徒の命を助けて頂き、有り難うございます」

清田が肩を貸した、眼鏡を掛けた線の細い若い男性教師はそう礼を述べた。彼は仕立ての良い高価そうなスーツを着ていた。知性と教養のありそうな男だった。年齢も清田とそれほど変わらないだろう。

「我々は義務を全うしているだけです。お気になさらないで下さい」
生存者の一団を機体まで連れて行くと、須崎が分隊の全員を一度集めた。

1の一員として校舎内に突入した羽沢彰人^{はやわあきら}一等陸曹が村田の肩を借りて、片足を引き摺りながらやってきた。その右太腿にはどす黒い血の染みが広がっていた。

「羽沢さん、一体どうしたんですか？ まさか…」

清田は心配そうに声を掛けたが、羽沢は心底機嫌が悪そうに応じた。

「馬鹿野郎。そんな事になったら手前で自分の頭をぶち抜いてる。こいつはヘマをやらかしちまったのさ」

羽沢は傷に負担をかけないように、右脚を伸ばしてその場にゆっくりと腰を下ろした。

「拳銃が暴発したんだ。安全装置を掛けてはいたが、それでも事故は起こり得るって事だな…畜生め！」

羽沢が毒づいている間、村田はバツクから取り出した圧迫止血包帯で彼の右太腿の止血に取り掛かっていた。弾丸は重要な血管を逸れているらしく、見た目の出血ほど酷い怪我ではなさそうだ。しかし、これ以上の任務の続行は不可能だろう。

「羽沢は見ての通り連れて行けない。清田、お前を代わりに連れて行く。1、2はもう一度、校舎内に突入し、＜目標＞の搜索を続ける。武器と装備の確認をしろ」

清田はレッグホルスターに収めてある拳銃の点検を特に念入りにやった。携行する火器は常日頃から何度も点検を繰り返しているが、実際に暴発した結果を目の当たりにすると、幾ら点検しても安心できるものではなかった。

「準備はいいな？ 行くぞ！」

須崎を先頭に、清田は天文台のある出入り口から校舎内に突入した。

1 s t d a y ?

校舎内に足を踏み入れた途端、フェイスマスク越しに濃密な死の臭いが鼻腔を刺激した。それは血肉と臓腑、屎尿の混じった悪臭だった。初めて嗅ぐその臭いに胃が激しく身悶えし、胃の内容物が食道まで競りあがってくる。何とか堪えようとしたが、清田の胃袋は何度も暴れ馬のように跳ね回り、その都度彼は寸前のところで我慢していた。しかし、とうとう堪らず、フェイスマスクを口許からずらすとその場で身を二つに折って吐瀉物を盛大に撒き散らした。足元で飛び跳ねる、朝食べた白米と味噌汁の若布、焼き鮭がタクティカルブーツに付着した。自分で吐き出したドロドロの未消化物と胃液の酸っぱい味と臭いで、清田は更に吐き続けた。

一頻り吐いて漸く気分が落ち着くと、清田は直ぐに立ち上がった。小銃を構え直した。まだ口中には胃液の不快感が残っている。出来れば口を水筒の水で漱ぎたかったが、今はそれどころではない。他の隊員は嘔吐していた清田の前に出て、入り口から直ぐにある階段の下に向かつて狙いを定めていた。死臭を嗅いだぐらいで吐いてしまった自分が情けなかった。清田は気を取り直して列に加わり、スタック隊伍を組んで慎重に階段を降りていった。先頭を白石崎、その左右を須崎と沢村凌二さわむらじょうじ等陸曹が固め、バックアップを担当する清田が最後尾を進む。

校舎内は不気味なほどにまで静まり返っていた。時折、何処からか哀れな犠牲者の声ならぬ断末魔が響いてくるぐらいだが、人間の本当に苦しみと喘ぐ声というものは、正常な神経の持ち主であるならば心を凍りつかせるような錯覚に陥る。

清田もその声を聞き、思わず身が竦んだ。幾ら過酷な訓練をこなしてきたとはいえ、所詮、訓練は訓練でしかない。実戦とは違うのだ。それは些細な違いかもしれないが、現に清田が五感で感じたものは彼に重大な影響を与え始めていた。何とか折れ掛けた心を奮い

起こして一步を踏み出したが、足元はまるで綿飴のようにふわふわと頼りなく、身体には気だるさにも似た停滞感が纏わり付き、動悸は早まり、ストレス性の手足の震えが現われ始めていた。防弾ベストの下の衣服はじつとりと湿り気を帯び、顔に被っている汗に濡れたフェイスマスクの着け心地の悪さは最悪だった。夢の中の出来事のように、今見ている光景は現実的ではなく、肉体から精神が遊離しそうだった。

それを繋ぎ止めようと清田は躍起になった。現実逃避をするなこの野郎。目を開けて前を見る。これが現実だ。これが現実なんだ。もう諦めて受け入れろ。サイト越しに見る校舎内の様子は白石の言った通りだった。

銃床を肩胛骨に押し当ててしつかりと固定し、ACOGサイトを首を傾けずに真正面から覗き、銃口は目線と水平に構え上半身を曲げて猫背の姿勢となりながら一步一步を踏み締めていく。覗き込んだサイトに映るのは、其処彼処に血飛沫や肉片がこびり付いた非日常的な校内だ。数時間前まで、此処で大勢の生徒達が平穏な学園生活を送っていたとは思えない。窓から差し込む穏やかな春の陽光を浴びて、てらてらと光る血糊はまだ真新しい。今や校内は、強く死を連想させる、地下納骨堂カタコンベじみた不穏な空間に変貌していた。ただ違うのは、そこに葬られるべき死者が闊歩しているという事ぐらいだろうか。

現在、清田達がいるのが管理棟だ。藤美学園の校舎は体育館やその他の施設を囲むL字型のような構造となっており、縦棒が生徒達の主な学び舎である教室棟、横棒が職員室や特別教室や学校機能の管理と維持を行う施設等のある管理棟であり、それぞれの棟は四階と二階が連絡橋で繋がっている。丁度、天文台のある出入り口はL字の縦棒と横棒を繋ぐ場所にあるので、階段を降りれば直ぐに連絡橋へと辿り着ける。

此処は生徒の数が教室棟に比べて集中していないので犠牲者の数が少なく、そして感染者の数も少ない。恐らく、混乱発生当初は使

われている教室がそれほど多くは無かったのだろう。故に生徒の数も少ないのだ。最上階には特に犠牲者の姿は見当たらなかった。混乱発生当初、生徒達は逃げようとして真つ先に階段を駆け下りたのだから当然だ。こうした非常事態を想定した訓練をしているのであれば、混乱を避ける為に統制して計画的な避難が行われる筈だが、今時は何処の学校も偏差値を上げるのに忙しく、本格的な防災訓練は御座なりになっているのが現状だ。廊下に転がる幾人かの犠牲者の死体の様子から察するに、殺人病感染者に食われて死んだのではなく、パニックを起こして我先にと逃げる生徒達によって踏み殺されたと見做すのが妥当だった。

それらは無残に食い散らかされた形跡も無く、比較的綺麗な状態を保っていた。そうやって死ねた生徒はまだ幸運だろう。生きながら肉を貪り食われて絶命し、その後で別の生者を求めて彷徨う死者となるよりも。それは考えられる人生の幕切れの中では最悪の部類に属するだろう。清田達は、圧死した生徒の中に高城沙耶の姿を探したが見つからなかった。

廊下に感染者の姿はなかった。ただ、その存在を知らしめる血痕や人体の一部、肉片等が其処彼処に点在しているだけだ。耳を澄ませば、長い廊下の突き当たりの曲がり角から感染者の微かな呻き声が聞こえ、ゆらゆらと夢遊病者の様に揺れる影法師が見える。

前衛の白石を先頭に進む一行は、四階の連絡橋を渡り、教室棟の長い廊下を進んで一番端の階段を目指した。高城沙耶のクラスがあるのは教室棟の二階だ。彼女は既にそこにいないかもしれないが、まだその近辺にいる可能性は高い。若しくは、生ける亡者の一員となって徘徊しているかもしれない。それを発見したのならば、速やかに頭をぶち抜いてその死体の写真を撮影し、証拠として頬の粘膜を綿棒で削ぎ落としてDNAサンプルを回収する。そうすれば煩わしい任務から解放される。後は生存者を出来る限り救出して離脱するだけだ。

元々、人気のない教室棟の四階という事もあり、廊下を通って下

の階へ行くまで何の障害に遭遇する事なく到達できた。問題は此処からだ。しかも残された時間はそれほど多くはない。大型輸送ヘリのチヌークが、屋上でローターを回したまま直ぐにでも飛び立てる状態で待機しているから燃料はそれほど持ちはしない。加えて、生存者を乗せて脱出する為来た時よりも積載重量は増加するのだから、余計に燃料を消費するだろう。

死角の多い階段を相互に援護しつつ、慎重にクリアリングしながら降りて行った。階段の踊り場にはパニックを起こした生徒達に踏まれて死んだ何人もの死体が折り重なるようにしてあった。

二階の踊り場をさつと通過し、白石が壁際に身を寄せて腰のユーティリティーポーチから取り出した鏡付きアンテナで廊下の様子を探る。何人もの感染者が廊下のずっと向こうの突き当たりまでふらふらと覚束無い足取りで彷徨っていた。窓から差し込む春の陽光にぎらぎらと脂っこい光を反射する廊下の血溜まりや、壁にこびり付いた肉片と人脂の真新しい生々しさに清田は思わず顔を顰めた。

白石が鏡付きアンテナで廊下の様子を窺っている間、清田や他の隊員は周辺を警戒していた。踊り場には何人もの圧死した生徒の死体が無造作に転がっている。余りにも痛ましい光景に清田は憂鬱だった。今時の高校生は総じて大人びているものだが、やはり子供である事に変わりはない。彼らがそんな目に遭って心を痛めない大人はいないだろう。

ふと、清田はある女子生徒の死体に目を留めた。今時の大人びた女子高生にしては珍しく、化粧気も少なく、髪は脱色せずに綺麗に切り整えられていた。その女子生徒は、何処と無く少し歳の離れた中学生の従妹に似ていた。だからだろう。この非常事態が始まって以来、なるべく考えないようにしていた家族や身内の事が思い起こされたのは。青森の両親や親戚の安否が今になって気になりだしたが、それらは任務の最中では邪念でしかない。古里への郷愁を振り払おうとしたが、一度芽生えた肉親への思いはそう簡単に収まるものではない。鋼鉄のような男であっても所詮は人の子に過ぎないの

だ。生まれ育った故郷や家族を愛しているのは清田とて同じだ。

状況が許すのであれば、その女子生徒とは言わず、犠牲者の遺体はなるべく回収して手厚く葬ってやりたい。だがそれは出来ない。優先すべきは、高城沙耶の捜索とその身柄の保護である。生死不明の、ただの一人の女子高生の命が今は何よりも優先すべき事項だった。

それほど長い時間ではなかった。ほんの数瞬しか、清田はその女子生徒の遺体を観察していなかったのだが、それで充分だった。ぐったりとうつ伏せに倒れていた女子生徒の指先が動くのを清田は見逃さなかった。

「班長」

「何だ？」

清田は須崎を小声で呼んだ。直ぐ傍にいた須崎は、音も無く傍までやってきた。

「今、あの女子生徒の死体が動きました。確認しますか？」

「よし。確認しろ」

清田は頷くと、取り回しにくい小銃の代わりに右太腿のレッグホルスターから9mm口径のUSPタクティカルを抜き、擦を切つてある銃口にサウンドサプレッサーを挿込み、油断無く構えたまま女子生徒に忍び寄り、そっと屈み込んで様子を窺った。右手で拳銃を握り、狙いを頭部に定めたまま、左手を伸ばして女子生徒の首筋に触れる。死者として蘇っても直ぐに頭部に銃弾を撃ち込めるようにと抜いた拳銃の出番は無かった。タクティカルグロブ越しの指先に人肌の温もりが感じられたのだ。死亡して間もないという訳では

ない。それが証拠に、注意深く観察を続けると、確かに脈拍を感じ取る事が出来た。

「生きてます。班長。生きてます」

清田は消音器を手早く外して拳銃を収めると、左手で後頭部を抱えるようにして女子生徒を慎重に抱き起こし、耳元で囁くようにして呼び掛けた。

「大丈夫ですか。しっかりとして下さい。大丈夫ですか？」

本来ならば大声で呼び掛けるのだが、周囲を感染者が徘徊しているとすれば大きな音を立てるのは自殺行為だろう。そもそも、音量を抑えているとはいえ、こうして声を出すのもなるべく避けるべきだ。今にでも感染者に気付かれるのではないかと焦燥感を募らせつつ、清田は辛抱強く呼びかけ続けた。

「ん…」

意識を取り戻したのか、女子生徒は小さな呻きを漏らすと僅かに身動きし、やがて瞼をゆっくりと開いた。

「此処は…」

朦朧としているのか、開かれた瞳の光は虚ろだったが、確かに意識はあり、頭から少し出血をしていたが様子から察するに感染者に噛まれている訳でもなさそうだった。

「大丈夫ですか？ 何処か痛みますか？」

清田は相手を驚かさないように穏やかな声音で訊ねた。

「ひっ…」

しかし、目覚めて直ぐ、目の前にヘルメットとタクティカルゴーグル、フェイスマスクという出で立ちの男がいて、驚かない女子高生はいないだろう。女子生徒は小さく悲鳴を漏らすと、暫く清田に抱きかかえられたまま身を竦ませていた。清田の腕の中で、臆病な小動物のように固まっている。

「自衛隊です。救助に来ました。どうか落ち着いて下さい」

暫く女子生徒は今の状況を飲み込もうと、清田に抱きかかえられたまま、首だけを巡らせて周囲の様子を窺っていた。自分を抱きかかえている男と同様に、人間らしさの欠片もない重武装の男達が周辺におり、踏み倒され圧死した何人もの生徒の死体が転がっている。時折、貪り食われる憐れな犠牲者の悲鳴や、人ならざる者と化した感染者の声ならぬ声が聞こえる度に、女子生徒は小さく悲鳴を漏らすと清田の腕の中で震えた。清田は、気の毒なぐらい怯えている女子生徒が可哀相でいたたまれなかった。

「大丈夫ですか？」

「…はい。何とか」

漸くある程度の状況が飲み込めたのだろう。女子生徒は弱々しいが、落ち着いた声で答えた。

「班長。これからどうしますか？」

「一度引くぞ。救助者を連れただまま搜索は出来ない」

須崎は廊下の様子を窺っていた白石と、沢村に同様の旨を伝え、来た道に戻るべく階段を登りつつクリアリングした。

「立てますか？」

取り敢えず、移動しなければならない。清田は女子生徒に手を差し出した。

「多分…やってみます」

女子生徒は清田の手を借りて立ち上がるうとした。

「……！？ 痛いっ！？」

しかし、唐突に足に走る激痛に女子生徒は大きな悲鳴を上げ、バランスを崩してその場に尻餅を付きそうになったが、寸でのところで清田が支えた。

「何処が痛みますか？」

「足が…足がもの凄く……痛いです……」

そう震える声で応える女子生徒の顔面は蒼白で額には珠のような汗が滲んでいた。見れば、女子生徒の右膝の辺りが紫色に変色し、大きく腫れ上がっていた。怪我の軽重をこの場で判断するのは難しいが、取り敢えず、これでは自力で歩く事など不可能だろう。

異変に気付いた沢村が戻ってきて、女子生徒を軽やかに抱きかかえた。沢村が引き返して女子生徒を抱えたのは、強靱な足腰を備え

る清田でも、大量の予備弾薬を背負っている状態では、小柄とはいえ女の子を抱えて階段を登るのは相当堪えるだろうという配慮からであった。

「さあ行くぞ。今の悲鳴で感染者に気付かれた」

背後から白石に促され、清田が警戒しながら階段を登ろうとしたその時だった。

「キヤアアアアアア！！！！！」

階下から布を裂く様な悲鳴が響き、反響した。清田は思わず、先頭を進む須崎の表情を窺った。その素顔は少しも窺えないが、恐らくうんざりしているに違いない。これでは何時まで経っても目標の高城沙耶の搜索すら出来そうにない。そもそも、このような状況下では無理もないのだろうか。

「白石、清田は階下の様子を見てこい。可能であれば生存者を救出しろ。俺と沢村は先行する」

しかし須崎は逡巡する素振りすら見せず、命令を下した。須崎とて、この命令に少なからぬ疑問を抱いているのだろう。なるべく生存者を救出したいのは彼も同じの様だ。清田は内心ではそう命令を下してくれた須崎にほっとしていた。

「了解。清田、行くぞ」

白石の先導に従って清田は階段を駆け下り、声の方へと急いだ。悲鳴の主は階段を降りて直ぐの場所にいた。

男子生徒が三人、女子生徒が二人、感染者達に囲まれていた。男

生徒達は刺又や金属バットなどを手に携え、目前に迫った感染者の群れの前に立ちはだかつて女子生徒達を守ろうとしている。一刻の猶予もない状況だった。

「清田！ お前は左をやれ！ 俺は右のをやる！」

清田と白石は、二階と一階の間の踊り場にいた。そこからならば射線は確保し易く、撃ち下ろす形となるので射撃は容易だった。清田は左側面から迫る感染者の頭部にダットサイトの照準点に素早く重ね、引き金を絞った。空気の漏れ出る微かな音、遊底の作動音とほぼ同時にサイト内に捕捉していた感染者の頭部が爆ぜる。左側面からは三体の感染者が迫っていたが、三体とも全てが頭部を撃ち抜かれ、その場に次々と頽れた。右側面から迫る感染者はコンクリートの手摺が遮蔽物となって上手く射線が確保できないので、白石は階段を飛び降りるようにして駆け下りると、生存者達と感染者の間に割って入り、猛然とした射撃を行って一挙に周辺を制圧した。清田も直ぐに階段を駆け下り、生存者達の周りを固めた。

疾風迅雷の如き早業に生存者達は呆気にと取られていた。が、清田と白石は彼らに構わず、油断なく据銃したまま周囲を警戒する。今の一連の行動でかなりの物音を立ててしまった。獲物の気配を感じた感染者の群れに退路を塞がれる前に移動をしなければならぬ。距離はまだ離れているとはいえ廊下には何体もの感染者が犇いており、清田達の方へ向きを変えてふらふらと歩みだしていた。

「あ、あの……」

生存者の一人が若干躊躇いがちに話しかけようとした。

「この中で噛まれた方はいませんか！？」

が、白石はそれを強く遮り、感染者による負傷者がいないかどうかを問うた。

「え………いません、いません！」

女子生徒の一人が答え、直ぐに清田がそれを確かめる。ざっと見た感じでは誰も嘔まれたりなどされていなそうだった。どちらにせよ発症すれば直ぐに分かる。その場合は鉛玉を頭に一発ぶち込むしかないが、そうするより他に手段はない。兎に角今は何よりも時間が惜しかった。

「大丈夫のようです！」

「よし！ 清田、さっさと移動するぞ！」

白石は迫り来る何体かの感染者を撃ち斃すとクリアリングしつつ階段を駆け登った。

「我々の指示に従って行動して下さい。屋上にヘリが待機していますので、そこまで先導します。落ち着いて行動して下さい。そうすれば全員、無事に脱出できますから」

清田は生存者達にそう念を押すと移動するように促した。清田の落ち着き払った態度に幾らか安心したのか、生存者達は指示に従って慌てる事無く白石の後に続いた。男子生徒は体力に劣る女子生徒を気遣っていたり、重武装の自衛隊員に守られているからといって油断する事無く手にした得物を構えていたり、自分に出来る事を冷静にやるうとしてるのが非常に有り難かった。

早くも階段には感染者達が集まりだしていた。前衛を務める白石は、感染者を掃討しながら確実に進路を切り拓いていた。飛び散る

脳漿、銃弾が肉を打つ湿り気を帯びた重い音、火薬の燃える酸っぱい匂い。立ち塞がる障害は何であろうと容赦はしなかった。足を食われた為に這いずって迫る感染者には、鋼板を仕込んだ強烈な爪先で蹴り込み、首の骨を容易く折った。格闘徽章を持つ白石の肉体はそれ自体が凶器であり、やろうと思えば素手でも動きの鈍い感染者を葬る事など朝飯前だった。

「もう直ぐだ！頑張れ！」

最後尾を追従する清田が生徒達を鼓舞する。重装備で階段を駆け上ってはいるが、清田の鍛え抜かれた心肺機能は少しも堪えてはいない。対して、標準的な高校生の体力しか備えていない五名の生存者達は早くも息を切らし始めていた。生き残る為には少々の肉体的な辛さは我慢してもらわねばならない。

「ああ!？」

女子生徒の一人が階段に蹴躓いた。が、清田は素早くその腕を掴み、乱暴に引き起こした。女子生徒は、強過ぎる清田の握力に顔を強張らせた。そんな些細な事を気にする清田ではなかった。少しの遅れが今は命取りとなる。急がなければ全員の命が危険に晒されるのだ。女子生徒は躓いた拍子に膝を強かに打ったようだが、そんなのは後で唾でも塗っておけばいい。後ろから急かして先を急がせる。その矢先だった。女子生徒を急がせ、自分も後に続こうとした清田は、ふと、靴底を通して踵に硬質な感触を覚えた。

その正体が何であるのかを確かめる前に、清田の視界が急変する。妙な浮遊間を感じ、身体から重力が唐突に喪失した。まるで見えないうちによって後方に引っ張られるようだった。そして、踊り場の窓から差し込む陽光を背に受けて、影のように立ち竦む女子生徒と目が合った。まるで信じられない、とでも言いたげにその目は驚愕に

大きく見開かれていた。次いで、僅かに潰れた空薬夾が目の前を、蠅が止まれるほどの速度で通過していく。薬夾の底部に打刻された記号と数字が一つ一つ具に見て取れた。

自分を取り巻く全てが重く、気怠く感じられた。時間はどろりとした重い粘質性の液体のようにゆっくりと流れ、蜷局を巻いて堆く積み上がっていく。全てが遅く感じられた。

全てが遅延した世界の中で、清田は、辛うじてだが左手を後頭部に添える事が出来た。その僅かな動きが、いずれやってくるであろう加速した時間の中ではその後の行動を決定付けるものとなった。

鈍い衝撃を感じると同時に、全てが元通りとなった。階段を昇っていた筈の清田は、いつの間にか床に仰向けに仰向けになっていた。少し遅れて、顔の直ぐ横に先程の空薬夾が硬質な金属音を響かせて転がった。

頭に被っている鉄帽と背負っているデイパック、そして後頭部に添えた左手のお陰で身体に大した痛みは感じなかった。清田は、顔の直ぐ傍に転がる薬夾を見て、事の経緯を直ぐに察した。

自分は、不覚にも、白石が発砲した際に生じた空薬夾を踏み、階下まで転落したのだ。手を添えて行った頭部の保護は訓練で培った防御反応だった。

「俺に構うな！先に行くんだ！」

清田は硬直したまま踊り場に立ち竦む女子生徒を叱咤した。俺は、エスの一員なんだ。女子高生に心配されるような野郎じゃない。しかし、現に空薬夾を踏んで階段を転がり落ちるといふ無様な失態を犯していた。思わず焦燥感が募る。

焦るな、落ち着け 呪文のようにその言葉を心の中で繰り返す。だが、清田のその平常心を取り戻す為に行うささやかな儀式は中断された。

何者かの気配を感じた時には黒い影が覆い被さってきた。それは

体中の至る所を無惨に食い散らかされた感染者だった。口を大きくだらしく開け、清田の柔らかい首筋に今にもむしゃぶりつこうとしていた。彼らは、生命活動を維持する上で必要不可欠な栄養分を摂取しようとする為でも、耐え難い飢餓感によって衝き動かされているという訳でもなく、ただ何かに命じられているかのように機械的に生者の血肉を食ろうとしているのだ。死後から数時間も経過していないと思われるのに、その瞳は早くもどんよりと曇り始めていた。清田は考えるよりも早く、覆い被さってきた感染者の襟首を掴み、腿の付け根に右足を押し当て、そのままの勢いに乗せて押し上げるようにして頭越しに投げ飛ばした。巴投げの要領で投げ飛ばされた感染者は、ろくに受け身を取る事が出来ず、壁に叩き付けられた後に頭から落下して頸骨を折って果てた。

最悪な状況だった。清田は直ぐに起き上がって先行する白石に追いつこうとしたが、見上げると、三階と二階の間の踊り場には既に感染者達がたむろしており、危うげな足取りで階段を下ろうとしていた。背後を振り返れば、二階と一階の踊り場にも、一階から上ってきた感染者が何体かいた。白目を剥いた、生気の無い目が清田を見上げていた。

完全に前後を挟まれていた。一刻の猶予も無い。強引に進むべきか、迂回して別の道を探すべきか。迷っている隙など無いのだが、清田は逡巡していた。

前から感染者達が階段を転がり落ちて来て、後からも感染者達が二階に辿り着いた瞬間、その間を擦り抜けるようにして清田は二階の通路に飛び出していった。引く事も進む事も出来ない、というよりもあつた筈の選択肢はもう無くなってしまっただけだ。故にそうするより他に無かったのだ。それが最良か最悪かは分からないが。

二階は、何体もの感染者が廊下のずっと向こうの突き当たりまで彷徨っていた。感染者の何人かは手に腕や脚、内臓といった人体の部品を持ち、熱心というよりも単に機械的に貪り食っていた。教室棟の二階は犠牲者の数が集中しているようで、廊下にいる感染者だ

けでも確認するだけでざつと十体はいるだろう。耳を澄ませば、幾つもの教室から人ならざる者達の食事の気配が感じられる。

下手な発砲は命取りだ

清田は本能でそう直感していた。感染者は如何いう訳か、音に反応するらしい。らしい、というのはあくまでまだ確証がないからだ。あくまでも直感でしかない。ひよっとしたら聴覚ではなく、嗅覚やその他の五感に頼っているのかもしれない。しかし、今は迷っている時間すら惜しかった。

清田は小銃は水平に据銃したまま、しかしまるで生気の抜けた屍のように廊下を緩やかに進む。ブーツの靴底を覆う特殊ゴムに清田は感謝していた。それによって足音は一切立たなかったが、ステルスエントリーの基本技術であるストーキングを駆使し、踏み出した足とは反対の足に体重をかけ、下ろすと爪先から踵にゆつくりと体重を移動して泳ぐように前に進む。身に付けた武器弾薬類や装備品の全てはガチャガチャと音を立てない様にしっかりと固定しており、金具類にはガムテープを巻いて擦れて音が出ないように工夫していた。気を付けるのは足の運びと自らの呼吸だけだ。

廊下で屯する感染者の眼前を通過する時、その容貌の惨たらしさに思わず息を呑んだ。特に酷かったのは、眼球の抉り取られた空っぽの眼窩で虚空を見つめる感染者だった。声にならない呻き声を食い破られた咽喉から漏らしていた。出来る限り距離を取り、清田は感染者達の傍を通過した。なるべく前方を見るように努めた。校舎内に踏み込んだ際に嘔吐しておいて良かったと思えた。今の清田の胃袋には何も入っていないから、吐き気に襲われる事も無かった。どの教室も数十体以上の感染者が屯している。そんな教室が廊下の突き当りまでずらつと並んでいるのだ。たとえサイレンサーを装着しているとはいえ、これだけ静寂だとその押し殺された銃声すらよく響くだろう。もしも一度でも引き金を引けば、蟻に集られるようにして忽ち食い殺されてしまう。

何も考えるな。じっくりと沈むんだ

清田は過酷な水路潜入の訓練を思い出し出していた。人間という生物は陸上で生き、活動する為に適した身体の構造を持ち、外部の環境条件が変化しても活動が阻害されないように自動的及び意図的に調整する優れた能力を備えている。しかし、高圧下の潜水では地上の何倍もの高い圧力に遭遇し、そうなる人間システムは余りにも脆弱だ。しかも単に圧力の直接的な作用ばかりでなく、間接的な様々な医学的作用を受け、人体に対する負担は大きく、それだけに常に生命の危機と隣り合わせであり、致命的な高圧障害を起こす危険性も高い。そうなった場合、陸上ではターミネーターのようにタフな野郎でも、水中ではまさに藁を掴むように溺れて死ぬ。だから此処で重要となってくるのは、どんな状況に遭遇しても先ずは慌てない糞度胸と、ゆっくりと壊死するかのように自己を客観的に観察する冷静さだ。これがなければ水路潜入が必要となる特殊作戦では使えない物にならない。

清田は何度も水路潜入訓練で溺れ死ぬ直前まで追い込まれた。手足を縛られた状態でプールに投げ込まれた事もある。もがいても決して水面に浮かび上がる事は無い。水は口や鼻から容赦なく浸入してくる。肺は酸素の供給がままならないというのに二酸化炭素を交換しようと躍起になって焼け付く。やがてもがく気力と体力を失い、身体は水底に沈んでいく。徐々に意識が闇に閉ざされていく中、明るい水面がやけに網膜にこびり付いた。生命の危機に瀕したとしても、取り乱さない精神力を養うという目的のある訓練だが、自己保存の法則に従って人間は生きている限り、死に直面すればその精神状態は普通ではなくなるのが当然だ。だが、己を殺して生き延びるという矛盾を達成できなければ、とてもではないが狂気に満たされた特殊作戦の世界では生きていけない。清田は、特殊作戦群の正式な一員となれるレベルにまで己を殺す方法を身に付けている。今が、

それを発揮する時だった。

清田はまるで水が流れるが如く淀みのない動きで、感染者の合間を縫う様にして進んだ。熱し過ぎず、冷め過ぎず、そして心は限りなく無に近く、だが、いざとなればダイナミックなアクションを起こせる精神状態に保つ。屋内戦闘では、敵と不意に遭遇した際に怯む事無く、相手に弾丸を叩きこめる状態でなければならぬ。精神と連動した肉体は、爆発的なエネルギーを秘めつつも、しんと静まり返っていた。無駄な動きは一切しない。必要な時、最低限の力を発揮すればいい。それが一番、効率が良くて効果的なのだ。

長い廊下の突き当たり差し掛かり、ふと、清田は今来た道を振り返った。十体以上、教室にいるのも含めれば数えるのも嫌になるほどの感染者の群れの中を突っ切ったという事実、清田は少しだけ腰が砕けそうになった。今思えば、なんと無謀な事をしたのだろう。失敗する確立の方が圧倒的に高かった筈だ。もつと良い方法は他にもあった筈だ。しかし、事後評価は、此処から無事に脱出してからだ。今は後で思いつく最善策よりも、現状で咄嗟に思いつく危なっかしい最善策の方が大事だ。

改めて小銃を据銃し、突き当たりを左に曲がって連絡橋に差し掛かったその時だった。何名かが背後の階段を駆け上る足音が聞こえた。生存者だろうか。しかし、あんなに音を立てては犇く感染者を徒に引き寄せただけだ。

清田は咄嗟に傍にあった柱の陰に隠れ、身を低くした。其処からならば階段を上って現われる生存者を監視し易く、且つ生存者からは自分の姿は発見され難い。それにまだ生存者と確定した訳ではないのだ。ひよっとしたら感染者かもしれない。

サイトを覗き込み、引き金にそつと指を掛ける。階段を上り終えて現われた複数の目標の頭部に何時でも銃弾を叩き込める用意を終え、清田はじつとその瞬間を待った。

1 s t d a y ?

階段を上って現われたのは二人の女性だった。一人は手に血塗れの木刀を携えた、墨を流したかのように流麗な黒髪を持つ女子生徒で、凜とした雰囲気を漂わせていた。もう一人は白いブラウスに黒いタイトスカートといった格好の、教師らしき大人の女性だ。この惨状にあっても女子生徒は冷静そのもので、教師らしき女性を先導している様子だ。その手に握る、血や肉片の付着した木刀を見れば、それ一本でこの修羅場を潜り抜けてきたのが容易に想像出来た。息切れ一つしていない女子生徒とは対照的に、教師らしき女性は既に息も絶え絶えの様子だ。しかし、それも仕方が無い事かもしれない。服の上からでも分かるほど豊富な乳房に肉付きの良い充実した腰回り、確かに運動には向かないだろう。制服姿の女子生徒はすらりと背が高く、運動力もありそうな健康的な肢体だ。平均的な女子高生以上の体力がありそうだった。

清田はタイミングを見計らって柱の陰からゆっくりと、相手にわざと視認させるようにして現われた。二人は、清田の姿を一目見るなり、硬直した。それもそうだろう。まるで戦争映画から抜け出して来たかのような重武装・重装備の男が突然物陰から現われて驚かない人間がいる筈が無い。一気に空気が張り詰めた。

「誰だ!？」

しかし女子生徒は直ぐに硬直から立ち直り、今までの感染者と全く毛色の異なる存在である清田に対し、毅然とした態度で誰何を行うと同時に、油断無く木刀を中段に構え、その切っ先を彼に擬していた。教師らしき女性は慌てて女子生徒の背後に隠れた。

心身を健全に鍛え上げる為の競技としての武道ではなく、相手の息の根を容赦なく止める為の武道に慣れ親しんでいる清田だが、そ

の無駄のない動作を見ればある程度の技量は推し量れる。あの少女は、その外見と年齢以上の戦闘能力を充分に有していると見做すべきだろう。近接距離での白兵戦ならば、例え清田といえども不覚を取るかもしれない。真の達人というものは、体格や膂力などに頼らずとも殺傷に到る充分な技を身につけている者を指す。特殊作戦群で冷酷無比な零距离格闘術を教えている、あるインストラクターは見た目は華奢で小柄な中年男性だが、黒縁眼鏡の奥の瞳は尋常ならざる凄みを帯びており、それが彼の壮絶な経験を十二分に物語っていた。あの格闘徽章を持つ白石でさえ、その彼には頭が上がらない。清田はその少女の瞳にあの達人の深淵を覗き込んだものを見出し、その未恐ろしさに思わず背筋が震えた。この少女は一体全体何をやっただ？

「自衛隊です。救助に来ました」

清田は落ち着いた声音と手振りで、相手を諭すように言った。手は小銃から離し、スリングベルトで身体の前に吊り下げている。本来ならばこの時、清田は小銃の狙いを向けたままであるべきだが、人質救出作戦の要領をそのまま実行すれば相手がどんな行動に出るか分からない。ましてや相手はまだ子供なのだ。実弾を装填した銃を向けられた事など一度もない筈だし、そんなものを向けられた時の精神的なショックは計り知れない。尤も、木刀で感染者を藁のように撲殺してきたと思われる少女が、銃を向けられたぐらいで怯むとは到底思えないが。

「…そのようですね。すみません、取り乱して」

女子生徒は木刀の切っ先を下ろすと清田に対して深々と一礼し、己の所作を謝罪した。その一つ一つの動作は日本舞踊のように美しく洗練されており、熟練した武道者特有の普段から自己を律した生

活から来るものだというのが見て取れた。そして恐るべき事に、この異常な状況下でも冷静な判断力を失っていない。普通であれば、この地獄に自衛隊員が助けに来た事実を、夢か現の出来事に捉えて当惑した表情を浮かべるもののだが。やはり、？普通の女子高生？と見做すべきではないだろう。

「いや、こんな有様では仕方が無いでしょう。取り敢えず移動しながらお話を」

清田は先程、女子生徒が張り上げた誰何の声に感染者が集まってくる前に移動を促した。二人は素直に指示に従い、清田の後を付いてきた。

「救助に来たというのは？」

清田に前方を任せてはいるが、女子生徒は木刀を手に油断無く周囲を警戒しながら訊ねた。

「管理棟の屋上にへりが待機しています。既に何名か収容していますが、時間はあまり残されていません」

正直、清田は焦りを感じ始めていた。白石と逸れ、本来の任務の完遂どころか、一体どれだけの生存者を救えるのかも分からない。未だに、目標である高城沙耶との接触すらままならないのだ。清田としては、高城沙耶の生存確認もそうだが、先ずはこの二人の安全を最優先にするべきだろうと考えていた。当初、この二人を屋上まで連れていき、分隊と合流し態勢を立て直してから再度捜索に取り掛かる方が良いだろう。お荷物を抱えたままでは自由に動ける筈がない。経路としては、感染者の多い教室棟の階段を上るのではなく、連絡橋を渡って感染者の少ない管理棟の階段を上って屋上へ到達す

るといふのを考えていた。

連絡橋を渡り切り、管理棟に差し掛かったその時だ。

「ひゃんっ」

素っ頓狂な声を上げて、一行の最後尾を進む女性が派手に転んだ。

「やーん！ なんなのよもー！」

転んだ際に打ち付けた腰を擦りながら、女性は尻をぺたんこ地面に着いたまま零した。女子生徒はそんな女性の様子に呆れたのか、溜息を吐いていた。

「走るには向かないファッションだからだ」

清田が駆け寄って助け起こすよりも早く、女子生徒は女性の前にしゃがみ込み、手を伸ばすとあっという間にそのぴっちりとした黒いタイトスカートのスリットを大胆に引き裂いた。女性が小さく悲鳴を上げるが、小さかったスリットが今では身に着けている紫色の下着が見えるほどに広がっていた。清田は、思わず目に飛び込んできた女性の色っぽい下着に顔を赤らめ、女性が転んだ事で生じた隙に襲い掛かってくる感染者がいらないか周辺を警戒する振りをした。しかし、脅威は見当たらず、頭頂部を搗ち割られた男性教師の死体が転がっているだけだった。

「あーっ！ これプラダなのにいー！！」

女性は下着が見えるほど破かれた事よりも、先ずブランド物のスカートが破かれた事に対して抗議していた。この生死の掛かった非常時にそんな詰まらない事を気にする余裕があるという事は、少な

くともこの女性はそれほど精神的に追い詰められている訳ではないな、と周囲に銃口を向けながら清田は冷静に分析していた。女性も女子生徒と同様に、意外と落ち着いているのだろう。

「ブランドと命……どちらが大切だ？」

「~~~~っ、両方っ！！」

女子生徒の呆れた様子への物言いに對し、女性はむきになっていた。一体、どちらが大人で子供なのだろうか。清田は背後の遣り取りに辟易すると同時に、美人の下着を見れた事を心の片隅ではちよつとばかり幸運に思っていた。

「時間が余り無いという事を忘れないで下さい」

清田はまだ何か言い足りない様子の女性をさっさと助け起こし、移動を再開しようとした。それと同時に、ヘッドセットから須崎の声が聞こえてきた。

<タケ、タケ。こちらザキ。送れ>

「こちらタケ」

<ロツクと一緒にではないのか？>

どうやら白石は生存者達を連れて無事に屋上に辿り着き、先行していた須崎と合流したようだ。そこで漸く、清田がいない事に気が付いたのだ。まさか、空薬莖を踏んで階段を踏み外したとは予想だにしていなかったに違いない。てつきり、最後尾について来るものばかり思っていたのだろう。手短かに、清田はこれまでの経緯を説

明した。

<…燃料が残り少ない。弾薬も大分消耗した。これ以上は持ち堪えられない。目標の搜索を打ち切る。送れ>

「タケ、了。確保した二名と共に屋上へ向かう。おわり」

いよいよ、目標の確保を諦めるしかないようだ。清田は直ぐに管理棟の屋上へと続く階段へ向きを変えた。

「これから屋上へ向かいます。自分の前に出ないようにして下さい」
二人は無言で頷いた。二人とも表情にこそ出しはしなかったが、少しだけ安堵しているように見えた。しかし、まだ安心するには早いという事も分かっているのだろう。

小銃を据銃し直し、管理棟の階段へと向かおうとする。が、別の方向から聞き慣れた乾いた音にはっと身構えた。あの乾いた音は銃声だろうか。いや、学校にそんなものがある筈が無い。しかし、誰かが何かしている、と考えてしかるべきだろう。それが生存者か、それともそれ以外の何かであるのかは分からないが。

「職員室の方みたいね……生存者かしら？」

最後尾を進む女性が、一行が抱いた懸念を口にする。

「そうだとしたら…助けにいかねばなりませんね。よろしいですか？」

清田は一応、二人に了解を得る事にした。他の生存者を助けに行つて窮地に陥る可能性もある。そうなった際の覚悟を決めて貰うの

と、後で泣き言を言われては堪らないという考えからだ。

「私は構いません。助けられるのであれば一人でも多く助けましよう」

「でも、危なくなったら逃げましようね」

二人の賛同の言葉を得て、清田は銃声らしき音の聞こえた方向へ進む。二人の言葉は素直に心から出たものなのか、それとも銃火器で武装している自衛官にこの場の主導権があるからこそ出た言葉なのかは分からなかった。願わくは前者であつて欲しいと清田は思った。こういう状況になつてしまつたからこそ、独りよがりになるべきではないのだ。そうすれば、自己の生存を優先するのは生物としては正しいかもしれないが、人間としては疑問を投げ掛けたくなくなる。清田はより一層警戒を強めた。生存者が抵抗する騒ぎを聞きつけて、感染者が集まつてくるからだ。現に、清田達一行のずっと後方を感染者がのろのろと追いかけていた。数はそれほど集まつてはいないが、何れは廊下を埋め尽くす勢いで膨れ上がるかもしれない。

「きゃああああああつ！！！」

女子生徒のものと思しき悲鳴が職員室の方から聞こえてきた。自然と清田は進む速度を上げ、遂には走り出していた。ずしりと重い小銃を抱え、重装備を身に纏つていながらも清田はものともせず、軽やかな身のこなしで疾駆した。彼に追隨できるのは女子生徒ぐらいなもの、女性は二人に引き離されないように息を切らして追いかけるのが精一杯だった。

廊下の角を曲がつた所で清田はその光景を目の当たりにした。廊下に轟く感染者の群れ。そしてそれらに対して必死に抗う二名の生徒。一人は眼鏡を掛けた小太りの男子生徒で、片膝立ち 自衛隊風

に言うならば膝撃ちの姿勢　で手には銃らしきものを構え、それを感染者に向けて発砲していた。もう一人は女子生徒で、間近に迫った感染者に対して腰を抜かしたのか、床に尻をぺたんと着いて必死になって後退っていた。

高城沙耶か！

その女子生徒の姿を一目見るなり、清田の脳裏に、網膜に焼き付けた写真の少女の姿が鮮やかに浮かび上がり、現実の彼女と二重写しになった。

清田の身体は脳が命じるよりも早く、行動していた。それは最早肉体自身に刻まれた直接的な反応だった。殆ど条件反射的に小銃を据銃し、サイト内に高城沙耶に迫った感染者の頭部を捉え、レチクル（照準十字線）が重なると同時に引き金は優しく、朝霜が降りるが如く柔らかく引いた。清田は重装備で走っても息切れ一つ起こしておらず、且つその精神も平静そのものであり、小銃を構えても決してその狙いはぶれてはいなかった。

音速を超えるライフル弾で感染者の頭部の爆ぜる様子がサイトを通して鮮明に見て取れた。それはほんの一瞬の出来事だったが、清田は腰の回転だけで瞬時に方向転換し、すぐ次の目標に照準を合わせて必殺の一撃を見舞っていた。清田以外の人間からすれば、何が起きているのか全く解らなかつただろう。それは機械の様な正確さと速度で行われた精緻を極めた射撃だった。だが、確実に引き金は五回引き絞られており、放たれた五発の5.56mm完全被甲弾は寸分の狂いも無く、感染者の頭部　解剖学的に人間を確実な死に至らしめる、両目と鼻の線を結んで出来る？死のT字？　を貫き、音速を優に超える速度とそれに伴う衝撃で爆裂させていた。

硝煙を燻らせる五個の空薬莖がほぼ同時に金属音を響かせて床に転がった。そして数瞬遅れて、本当の意味での死を迎えた感染者達の、頭部を失った身体が糸の切れた操り人形の様になんかと頽れてい

く。湿った砂袋が叩き付けられるような重い音が響き渡った。

清田は職員室へと続く廊下に他の感染者の姿が無い事を確認すると、そこで漸く安堵の息を吐いた。清田が感染者を排除し終えてから僅かに遅れて女子生徒が到着したが、床に転がる頭部の爆ぜた五体の屍を一瞥し、自分が手に携えている木刀の出番が無い事を察した。更に遅れて女性も到着した。

「私の出番はないという訳か…まあ、それはそれで何よりだ」

「ちよ…二人…と…も…走るの、はや、過ぎ…特に…自衛隊の……なんで……そ、んな…格好…で……」

女子生徒は軽く呼吸が乱れている程度だが、女性は手に膝を付いて身体を折り曲げて荒い息を整えるので精一杯の様子だった。走るには向かないファッショント、そして走るには向かない肉付きの良い艶かしい姿態であれば仕方が無いのかもしれない。日頃から運動をせず、それも社会人ともなれば体力の低下は学生時代に比べれば激しいものがあるだろう。

「自衛隊です。救助に来ました。安心して下さい」

小銃を下ろし、スリングベルトで身体の前に吊り下げると清田は歩み寄り、力無く床に座り込んだままの高城沙耶の前に屈み込んだ。沙耶は清田が先程撃ち倒した感染者の脳漿と肉片に塗れた顔で呆然と虚空を見つめていた。清田が視界に入っても一切の反応を示す事は無かった。

余りにも多くの凄惨な光景を目の当たりにして、まだ十代半ばの少女の精神が耐え切れる筈が無かった。ほんの数秒前までは歩く死体に貪り食われる寸前だったのだ。沙耶は精神の崩壊を防ぐ為、本能的に精神と肉体を現実から切り離れたのだろう。不意に難燃繊維

のフェイスマスク越しにアンモニア臭が鼻を衝いた。沙耶の顔から目を下方に転じると、彼女がぺたんこ座り込んだ場所を中心に透明な液体が輪となってさあつと広がっていった。清田がそうしようと考えてるよりも早く、床に着いていた片膝に液体の輪が触れた。濡れてしまつては仕方がないし、何よりも避けようとするのは失礼な行為に思え、清田は敢えてそのままにする事にした。恐怖のあまり自律神経の平衡が失われ、結果として膀胱の収縮を引き起こしての失禁は訓練された兵士にもある。交感神経系の役割は、行動を起こす為に必要なエネルギーを動員してくる事であり、一方の副交感神経系は消化と回復を担当している。この二つの神経系によつて通常は身体のエネルギー需要の全般的な調律が保たれているが、ストレスが極度に高まると闘争 逃避反応が発動されて、生き残る為に交感神経系が全身のエネルギーを総動員し始める。この為、急をようさない活動、例えば消化や膀胱の制御や括約筋の制御などは完全に放棄される結果になりやすい。故に、尿や便などの失禁は少しも珍しい事ではない。生き残る為にあらゆるエネルギーを供出しようとして、身体が文字通りのバラストを放り出す為である。沙耶のこの反応は、生理的に正常なものだった。ましてや何の訓練も受けた事がなく、生命の危機を強く感じた事のない十代の少女ともなれば尚更だ。

如何したものかと清田が考えあぐねていると、女子生徒が傍に立ち、彼の肩に手を置いて、自分に任せて欲しい、と目で合図した。清田は黙つて頷くと場所を変わった。

「もう大丈夫だ……安心していい。何も怖いものなんてないよ。誰も君を傷つけたりなんかしないよ」

女子生徒は沙耶の震える細い肩に手を置き、優しく微笑んで見せた。清田には、その微笑みは不思議と人を落ち着ける魅力があるように思えた。同時に、歩く人喰い死体が徘徊するこの状況下で、そ

のように？安らかに微笑む事の出来る？彼女は普通の女子高生ではないという確信に至った。武芸者としての厳しい鍛錬だけで、年端もいかぬ少女を老成させるとは到底思えない。人間の根幹を揺るがすほどの強烈な体験をしなければそうはならないものだからだ。彼女は、過去に悍ましい何かに遭遇したのだろう。それが何であるのかは想像がつかないが、人間のどす黒い内面に関連しているに違いない。肉体的、精神的に何度も追い込まれた経験のある清田だが、人間の剥き出しとなった邪悪な一面にはまだ遭遇した事はないし、自身が発揮した事もない。それは死と隣り合わせの訓練でも体験する事の出来るものではないだろう。

それが功を奏したのだろうか。今まで無反応だった沙耶の瞳に生気が宿ったかと思うと、次の瞬間にはぼろぼろと大粒の涙が零れ出していた。強烈なエネルギー動員反応に生理的な代価が伴うのは当然であり、無視されていた副交感神経の要求が戻ってきた時、動員と同じくらい強烈な揺り戻し反応が起きるのだが、これはしばしば凄まじい虚脱感や眠気となって現れる。冴子の微笑みは、沙耶を神経系の揺り戻し反応による虚脱から引き戻すだけの魅力を備えていた。

「う、ううつ…ああ、ああああ…うわああーん」

やがて沙耶は女子生徒に縋り付いて泣きじゃくり始めた。まるで幼子のように胸に顔を埋めて泣きべそをかく沙耶を、女子生徒はその頭を撫ぜ、背中をぽんぽんと優しく叩いて宥め賺した。暫くの間、沙耶が落ち着くまでは女子生徒に任せられた方が良さそうだ。清田はそう判断すると他の生存者に声を掛けて回った。

「そこの君、大丈夫かい？」

沙耶を女子生徒に任せ、清田は眼鏡を掛けた小太りの男子生徒に

声を掛けた。手に持っている銃らしきものはどうやらガス圧式の釘打ち機のように、照準をつけ易くする為のストック代わりの木製の定規がゴムテープで固定されていた。釘打ち機は普通、密着させた状態でなければ釘を打ち出させないように安全装置がついているものだが、彼はそれに細工を施して飛び道具として使用しているのだろう。一見した所、外傷も無く、精神状態もそれほど悪そうには見えなかった。

「は、はい。僕は何ともありません」

「そうか。それなら良かった。何かあれば遠慮なく言ってくれ」

次は未だに荒い呼吸を整え続けている女性の傍に寄った。

「大丈夫ですか？」

今では女性はその場にしゃがみ込み、非常に具合が悪そうだ。顔色も優れない。清田も傍に屈み込み、様子を窺った。

「いえ……あの……息、切……れ……です……から……そんな……に……気に……」

長い髪が汗でぺたりと張り付いた顔を上げて女性は清田を見遣った。白い頬がほんのりと朱に上気した様と荒い呼吸、そして仄かに香る女特有の甘い体臭に、清田は場違いな興奮を覚え、思わず目を逸らした。フェイスマスクとタクティカルゴーグルを身に付けていて良かった、と思った。恐らく、今の自分は顔を真っ赤にしているに違いないから。同時に、この非常時に何を悠長な事を考えているんだ、と自身を戒めずにはいらなかった。

「…よろしければこれを」

清田は弾帯に括り付けている、四発の四〇mmグレネード弾を携行可能なようにデザインされている、SOE社製のキャンティーン・カバーから2クォートの水筒を取り出し、蓋を開けて女性に差し出した。

「あ…すみません…」

女性は息も絶え絶えのまま礼を述べ、受け取った水筒に口を付けて喉を潤した。あまりにも辛そうな様子なので、清田は背中を摩つてあげようかと思っただが、じんわりと汗によって湿り気を帯びたその薄い背にはブラジャーのラインがくつきりと浮かび上がっており、流石に躊躇われた。

清田は警戒する振りをして、生存者達から少し離れてから咽頭マイクのスイッチを押し、なるべく聞こえないように小さな声で吹き込んだ。少しばかり興奮していたが、それは不可能と思われた目標との接触が達成出来たからだろう。

「ザキ、ザキ。こちらタケ。目標の高城沙耶と接触、確保した。これから大至急屋上へ向かう。まだ燃料と弾薬に余裕はあるか？ 送れ」

しかし暫く待っても応答はなかった。清田は不意に胸中に芽生えた不安に苛まれた。

「ザキ、応答せよ。聞こえているなら応答せよ。送れ」

清田は語気を強めて再度応答を求めた。それはほんの数秒という短い時間だったかもしれないが、清田にとっては針の筵の上で永遠

の時を過ごしているかのように居心地が悪かった。あのタフで狂った野郎どもがたかが動きの鈍い死体なんかに食われる筈がない、と思いたかった。

くタケ、タケ。こちらザキ。感染者の大群と交戦中の為、交信出来なかった。感染者は更に増えつつある。燃料も弾薬も底を尽きかけている。こちらからの迎えは寄越せない。送れ>

清田の心配は杞憂に終わったが、骨伝導ヘッドフォン越しに怒号と爆発音が聞こえ、どうやら向こうは余り喜ばしい状況という訳ではなさそうだった。手が離せないほど忙しいという事は、管理棟の屋上に殺到している感染者の数は恐ろしい数という事になる。つまり、屋上のへりを目指して進めば、それは自ら進んで感染者の餌になりに行くという事を意味していた。

清田は、振り返って生存者達の様子を確かめた。女子生徒はまだ泣きじゃくっている沙耶を宥めすかしており、女性は漸く呼吸が落ち着いた様子だが疲れきっていて、男子生徒は無線でやり取りをする清田に不安げな視線を投げ掛けていた。清田一人ならばまだ何とかなるかもしれないが、この陣容で感染者の群れを強引に突破しようというのは無謀以外の何ものでもなかった。確実に何名かが犠牲になるのは避けられない。それが、今回の救出目標である高城沙耶となる可能性は充分にある。救助すべき対象をむざむざ危険に晒すべきではないだろう。

「こちらからも無理だと思われる。四名の生存者を単独でのエスコートは不可能。送れ」

その後は暫く沈黙が続いた。このまま確保した生存者をへりで後送して撤退するか、それとも救助班の何名かで感染者の犇めく校内を強行突破するか。現場指揮官である須崎は、恐らく剣崎に指示を

仰いでいるのだろう。実行部隊にはかなりの裁量権を与えられているとはいえ、政治のトップクラスからのオーダーともなればやはり後方で控える群長自身の考えを聞かなければならない。
ややあつて、須崎から返答があつた。

<タケ、タケ。こちらザキ。我々は撤退する>

予想していた通りの答えだった。だが、このまますんなりと従う訳にもいかない。

「再ピックアップは不可能なのか？ 送れ」

たとえどんな命令であろうと遂行する覚悟と能力を備えているという自信が清田にはあり、またそれを誇りとしていた。ただ、疑問に答えてもらいたいだけだ。一旦、ヘリは救助班と生存者達を安全地帯まで運び、そこで給油と補給を済ませて迎えに来てくれるのかどうか、そうすれば校内の何処かに身を隠して少し留まるだけで済む。

<燃料の補給が難しいらしい。LST (Landing ship, Tank: 戦車揚陸艦。ここではおおすみ型輸送艦の事を指す) の航空燃料が底を尽く寸前だ。燃料の確保が出来ない限り、再度ヘリを迎えに寄越す事は出来ない>

「どれくらいで確保できる？」

<現在、補給艦が佐世保を出港した。数日中に邂逅すると予測されるが、状況が状況だけに断言は出来ない>

本来であれば、急遽この事態に対処する為に編成された統合任務タスクフォース

部隊の作戦遂行能力を最大限に発揮する為に必要不可欠な兵站は確保されていて然るべきのだが、過去に幾度も発生した自然災害と異なり、今回の“歩く人食い死体”による社会秩序の混乱及び甚大な被害は全く以って別次元の問題である。各駐屯地、各基地も被害を受けており、統合任務部隊の活動は最初から円滑というのは望むべくもなく、必要最低限の編成で可及的速やかな対応を余儀なくされていた。その為に安定した兵站の確保は後回しにされ、統合任務部隊には初動分の物資しか手元になかった。海上自衛隊佐世保基地に停泊する、第一海上補給隊の補給艦が統合任務部隊への同行が遅れたのはこういう事情からだ。そもそも、米軍と違い、自衛隊にはこのように初動対処能力と兵站到大きな問題を抱えており、依然として続く低迷した景気の煽りを受けて予算は年々縮小され、必要な装備や物資が各部隊に行き渡らないという深刻な状況はいつまでたつても改善される見通しが立たないのが現状だ。2011年の東北の大地震の際、派遣現部隊は兵站が確保されるまでかんばんのみで過ごさなければいけない日々もあった。これで何処か安全な場所に籠城し、補給を済ませた突入班の救助を待つという選択肢は消えた。回収が一体何時になるのかも分からないのでは、安全な場所に籠城したとしても限界があり、またそこが本当に安全であるかどうかも確証が持てないだろう。数日か、それとも数週間か。長期間に渡って籠城するには相応の物資が必要不可欠だ。学校が避難所に指定されていたとしてもその殆どが名ばかりで、この藤美学園もその一つである。ここに十分な物資の備蓄があるとは思えないし、また、感染者の溢れ返る校内を探すととなると現実的ではない。

<タケに付与する以後の命令については、救助者の人命、特に高城沙耶の生存を最優先とする。新たなLZ(Landing Zone e:着陸地点)は新床第三小学校。五日後の一七 までに到着せよ。以上で了解か? 送れ>

清田は軽く深呼吸してから、短く応答した。

「タケ、了」

<……清田、絶対に死ぬな。生きて帰って来い。終わり>

たったそれだけの短いやり取りだったが、それで充分だった。

清田は直ぐに思考を切り替えた。取り敢えず、これからの行動を会った生存者達に話すべきだろう。この地獄に助けに来た自衛隊員から脱出が不可能である旨を伝えられた生存者達の士気が如何なのか予想出来ない清田ではない。伝えるのは気が重かったが、それでも自分がやらねばならぬ事である。それに先送りしても仕方が無い。

清田は一行の元に戻り、先程の内容を伝えた。

「計画が変更されました。ヘリでの脱出は困難と判断され、別の方法での脱出を模索します」

生存者達の反応は様々だったが、如何いう事なのか説明を求めようと清田に食って掛かる者がいないのが幸이었다。概ね、落ち着いた様子なのが遣りやすかった。それとも、最初からこの地獄から簡単に生還できるといふ甘い考えを持っていなかっただけなのかもしれないし、清田の今の言葉で諦めただけなのかもしれない。

「取り敢えずその職員室で休憩しましょう。何名かは息を整える必要があるようです……ついでに今後の事について話します」

清田は職員室の引き戸を、音を立てないように開き、室内をクリアリングして危険がない事を確認してから生存者達を招き入れた。職員室は雑然と散らかっており、血溜まりや血痕がそこいらにある

のが見て取れた。いずれもその痕跡はまだ生々しく、この惨劇が発生してから数時間しか経過していない事実を改めて思い知らされた。感染した教師や学園職員の姿が無いのは、生者の血肉を求めて外に出ていった為だろう。清田は全員が職員室に入ったのを確認してから戸の鍵を閉めた。

不意に爆音が鳴り響き、職員室の窓ガラスが震えた。窓ガラス越しに空を仰ぎ見れば、二機のヘリコプターが飛来した時と同様の飛行経路を通って遠ざかっていく。あのヘリの中では、生き延びた数少ない生存者達が地獄からの生還に安堵しているのだろう。

あのヘリの中にいる生存者達と自分達とでは何が違い、何に差があったのだろうか。それは考えたところで答えが出るものではないし、仮に導き出されたとしても自分達が脱出できなかったという事実が変わりはない。あの機体を見送る生存者達の心境は如何程のものだろうか。全員が全員、あのヘリに乗ってこの地獄から脱出したかった筈だ。それは清田とて同じだったが、今更過ぎ去った事とやかく言っても事態が好転する訳ではないのは誰もが承知していた。生存者達は、ヘリの幾影が見えなくなるまでその姿を目で追っていた。

1 s t d a y ?

「こんなものでいいだろう。ありがとう。助かったよ」

「いえ、お役に立てて良かったです」

清田は男子生徒と協力して、職員室にあった机やダンボールなどの雑多なものを戸の前に積み重ね、即席のバリケードをこしらえた。これで感染者達が押し寄せてもある程度の時間は稼げるだろう。それらを一度、纏めて吹き飛ばせる程の爆薬は携行している。悪あがき程度ならば充分に可能だ。

生存者達は概ね落ち着いている様子で、給湯室の冷蔵庫に入っていた飲料を飲んだり、乱れた呼吸を整えていたり、各人が思い思いに過ごしている。沙耶はひとしきり泣いた後、漸く平静を取り戻したらしく、職員室に併設されている給湯室で浴びた返り血や肉片を洗い落としていた。女子生徒は涼しげな顔で椅子に腰掛け、寛いでいる。女性はこの中で最も疲弊しているらしく、自分の教員机に突っ伏したままぐったりとしていた。

清田も少しだけ疲労を感じていた。肉体的よりも精神的なものによるのが大きかった。四人の民間人を、誰の助けも無しに安全地帯まで連れていかなければならないのだ。流石にこれからの事を考えると疲れを覚えずにはいられないが、下手に顔に出す訳にはいかない。救助すべき対象の前で、救助に来た自衛隊員がそんな顔をすれば余計な不安を与えるだけだ。何事にも動じない、糞度胸を備えた鋼鐵の兵士を演じなければならないのだ。

清田はフェイスマスクを僅かにずらして口元を少しだけ露出させると、水筒に口を付けた。口を付けた途端に清田はその水筒が先程女性に渡したものである事を思い出し、急に恥ずかしさが込み上げて来た。思わず、女性の様子を見遣る。彼女は突っ伏したままで清

田には気が付いてはいなかったが、彼の脳裏には先程の情景が生々しく否応もなしに再生されていた。

自分が今、手にしている水筒の口を、あの女性の、瑞々しくぼつてりとした魅力的な唇が触れていた。飲み口の縁を注意深く観察すると、無味乾燥な暗緑色のプラスチックに薄っすらと口紅が付着していた。清田が口を付けた時、水の量は半分減っていたから、あの女性は貪る様に飲んだのだろう。水にはあの女性の唾液が多く含まれている。意識していなかったとはいえ、清田は女性の？体液？を水と一緒に飲んでいた。だからだろうか。代わり映えのしない水道水が、妙に甘美な飲み物のように感じられたのは。他人の粘膜からの分泌物を自身の身体に取り込むという行為は、少なからぬ性的な妄想を惹起させるには充分だった。それも、あれ程の美人ともなれば殊更に妄想を掻き立てられるのも仕方がない。清田は健全な青年なのだから。

女性は、大柄な清田からすれば一回りも小柄だが、女としては充分に背が高く、恐らく一七〇半ばほどもあるだろう。しかし、ただ背が高いばかりではない。大人の女として充分に成熟しており、たつぷりとした乳房に充実した腰周りと豊艶な肉付きをしている。柔和な顔立ちの美人で、穏やかな雰囲気を漂わせているのも彼女の魅力の一つだろう。先程、彼女の体臭を嗅いだ際に消毒液の微かな匂いも嗅ぎ取れたので、この学園の保険医なのかもしれない。

優しそうな容姿の美人で、肉体的に充分に成熟し、尚且つ学校の保険の先生という三つの要素に清田は強く心を動かされるものがあった。自衛官は、看護師や保育士といった職業に従事する女性と結婚する傾向が高い。両者に共通するのは職場に同性ばかりという事もあり、異性との出会いが少ないので自然と出会いを求めて、既知のつてを頼つての合コンが開かれたりする事が多く、更に自衛隊では未婚の曹を主な対象とした？ふれあいパーティー？なる、約二五万人もの人員を擁する日本最大の組織力を背景に開催される所謂お見合いパーティーがあり、独身隊員はここで将来の伴侶を見付ける

事が多い。また、それらの職業に従事する女性のイメージに、包容力があり、命を扱う仕事である以上しつかりとしている、というのがあり、自ずと演習などで家を留守にする事の多い自衛官は、安心して家庭を任せられる女性に惹かれるのだろう。或いは、有事の際には戦場に赴く兵士という職業柄なのか、癒しを与える存在を無意識のうちに求めているのだろうか。

彼女ほどの容姿の持ち主を、世の中の男は黙って放って置く道理がない。引く手数多な彼女は、今までの人生で恋人に不自由した事が無いのだろう。それもやはり、彼女の魅力に見合う男達が、熱烈にアタックしていたのだろう。

一体、今まで何人の男と寝てきたのだろうか。そして彼女は、その男達とどのようにしてベッドの上で乱れるのだろうか。母性的ですらあるあの優しい目が淫靡に輝き、男を悦ばす為だけに口は食物以外のものを啜え、豊艶な肉付きの姿態で奉仕し、綺麗な指先が無骨な身体の上を妖しく這い回る様子を思い浮かべ、清田は場違いな興奮を覚えると同時に、そんな自分がとてつもなく恥知らずな人間に思えた。

糞。こんな時に俺は何を考えているんだ。そんな事を考えている余裕がお前にあるのか清田武。己を激しく罵ると同時に、そのような妄想に耽る事が出来るのであれば、今の自分はそれほど切羽詰まっつてはおらず、余裕があると見做すべきだろうか。余裕がなくなるのと、くだらない妄想を抱く事すら出来ないものだ。思考に余裕があれば、それだけミスを犯す確率も減る。

それが済むとフェイスマスクを直ぐに戻し、心の隅ではその水が金と同価値であるように想いながら、水筒の口を閉めてケースに乱暴に突っ込むと、改めて生存者達一人一人の様子を見て回って声を掛けていった。

「大丈夫かい？」

最初に、床に腰を下ろして手にした武器　ガス圧式の釘打ち機の簡単な点検と手入れを行っている小肥りの男子生徒に声を掛けた。

「は、はい」

男子生徒は清田に声を掛けられると驚いた様子で顔を上げ、戸惑いの表情を浮かべていた。男子生徒と視線を合わせる為に清田は片膝を付き、タクティカルゴーグルを鉄帽の前額部まで上げた。

「何処か怪我はしていないかい？　何かあれば遠慮なく言ってくれ」

「僕は何ともありませんけど…その、高城さんが……」

「高城さん？」

男子生徒は給湯室の方を心配そうに見遣った。清田は高城沙耶の事を知ってはいたが、当然の如く敢えて知らない振りをした。

「ツインテールの女の子です。何時もは強気なんですけど……さっきみたいに泣いているのなんて初めて見ました。何とも無ければいいんですが」

驚いた事に、彼はこの状況下で自分よりも他人である高城沙耶を心配していた。そう言えば、この男子生徒は、バリケードの構築を手伝って貰う前に給湯室にいる沙耶の様子を見に行つて、彼女に何やら当たり散らされていた。その頼りない外見とは裏腹に、このよくな非常時に他者を気遣える優しさを備えているとは存外に人間が出来ているらしい。清田は彼が少しばかり頼もしく思えた。

「こんな時に他人を心配するなんてそうそう出来る事じゃない。君

は凄いな」

清田は拳を握り、男子生徒の胸を軽く叩いた。

「いや、別に僕は……」

「謙遜しなくてもいい。これから暫くは行動を伴にするんだ。俺の名前は……田中だ。どうか俺を助けてくれよ」

心苦しさを覚えつつも、清田は本名を名乗る事はしなかった。彼は右手のタクティカルグローブを外すと、その手を男子生徒に差し出した。

「平野耕太です。宜しくお願いします」

耕太が怖ず怖ずと清田の手を握ると、清田は少し強めにそのぷくぷくと肉付きの良い手を握り締めた。耕太は痛みに顔をしかめたが、負けじと清田のごつい手を握り返した。

「いい返事だ。男だったら女を守らなくちゃいけないからな」

出会ったばかりで間もなく、素性も世代も異なるとはいえ、清田は耕太との間に確かな信頼を感じた。

「宜しく頼むよ」

清田は立ち上がり、次は給湯室にいる沙耶の様子を見に行った。

「調子はどうか？」

給湯室の出入り口を潜りながらその声を掛けた清田だったが、直ぐに彼は石像のように固まってしまった。

先ず最初に目に飛び込んできたのは、真っ白なヒップから脚にかけての流麗なラインだった。白桃を彷彿とさせる小振りなヒップは十代の健康的な少女らしく、染みや弛みとは一切無縁で、張りがあって瑞々しい。小鹿のようにすらりと伸びた脚は、清田の上腕と同じぐらいの太さしかなかった。

沙耶は、先程の自身の失禁の後始末をする為に、スカートとショーツを脱ぎ、下半身に何も身に付けていない状態で、給湯室の流し台に向かってそれらを洗っていた。沙耶も、同様に微動だにせず、硬直したまま闖入者である清田を凝視していた。

「……」

先に動いたのは清田だった。男を魅了して止まない、女子高生の剥き出しの白いヒップから視線をそっと外し、そのまま、まるで凶暴な獣を刺激しないように細心の注意を払いながら、そろりそろりと後ずさった。

「……最低っ！ この変態！ 変態！ 変態！」

だが、直後、沙耶は火が着いたかのように激昂し、声を張り上げて清田に罵声を浴びせ、顔を羞恥に染めながら思わず手にしていた自身のショーツを握り締めて彼に投げつけていた。清田の視界が、白一色で覆い隠される。丸まったまま投げ付けたショーツは、放物線を描いて丁度彼の顔に直撃し、その視界の殆どを隠すように被さっていた。清田は、頭に布を被せられた犬のように、そのままじっとしていた。

顔に被さっているショーツは、今時の女子高生らしく、シンプルな意匠ながらも自身のスタイルをより良く見せたい為か股上の浅い

スキャンテイーで、手触りの良い高級そうな生地のものだった。湿り気を帯びた生地からは水の匂い以外に、微かなアンモニア臭とその他の排泄物の臭いが嗅ぎ取れ、そういった趣味の人間には堪らないアイテムかもしれないが、清田は思わず他人の排泄物の残滓の臭気にえづきそうになるのを堪えると同時に、どんな美少女の下着でも臭いものは臭いものなのかと少しばかり驚愕した。美少女も、出すものは出すという訳だ。

ショーツを投げつけてから沙耶は、はっと冷静になって気が付いた。清田が硬直している理由が、自身の下着の発する臭気にある事を察し、己の迂闊さと、他人には知られたくはない個人的な実情を暴露してしまつた恥ずかしさに、更に顔を赤く染めた。そして、今の自分が下半身に何も身につけていない事実を今更のように思い出し、慌てて上着の裾を引っ張って前を隠そうとしたが、清田の完全に隠れていない視界には、沙耶の萌え始めた下腹部の草原がちらりと映った。

「か、返しなさいよっ！ この変態！」

腰が引けたまま沙耶はそう言ったが、下着を投げつけるきっかけを作ったのは清田だが、実際にそうしたのは自分自身であり、彼女の手から奪つた訳ではないのでいまいち説得力に欠けた。今の彼女には学園史上類を見ない才媛と謳われた面影はなかった。目尻に涙を浮かべ、必死になつて前を隠そうと上着の裾を引っ張りながら縮こまる沙耶は、追い詰められた小動物のようにしか見えなかった。

清田は、顔に覆い被さっている沙耶の下着を指で摘んで引き剥がすと、彼女を見ないように視線を背けながらずっと一歩前に出て、その手を差し出した。沙耶は清田の手から自身が投げ付けたショーツを引つたくるように奪うと、急いでスカートと共に身に付けた濡れた衣服の感触は不快だが、何時までも下半身を外気に晒してい

る方がよほど不快で心許ない。無論、沙耶が衣服を身につける間、清田は彼女を視界に入れないように背を向けていた。本来ならばこの時、清田は気を利かせて給湯室から出ていくべきであったが、本来の目的は沙耶の様子を確認する事であり、それを果たさずに出ていったのであれば覗きにきたとしか思われても仕方がない。

「…確認せずに部屋に入つてすみませんでした」

背を向けたまま、清田は先ず謝罪の言葉を口にした。が、暫くの間、沙耶は何も言わず、終始無言であった。清田にはその沈黙が耐え難く、逆にまだ口汚く罵られる方が気が楽だった。だが、このまま逃げ出したのでは駄目だ。取り敢えず、言葉を続けた。

「何処か怪我や、具合が悪いというのはありますか？」

訓練などの小休止の際に健康状態を具に把握するのはもはや習慣と化していた。我慢する事も時には大事だが、体調が優れないのに無理して訓練をしても普段通りの効果は得られないし、事故を起こしてしまつては元も子もない。それに、指揮下の隊員の状況を把握するというのは非常に重要であり、これを疎かにする者は何処の国の軍隊でもないだろう。この事はそっくりそのまま今のこの状況にも当て嵌まる。今は、生存者達の状態をよく把握しなければその後の行動に支障をきたす恐れがある。仮に誰かが足を怪我しているのであれば、自ずと集団の移動速度は低下する。それを事前に把握していれば対策や意識をする事が出来、全く知らないというよりも行動は円滑に行えるだろう。知っているのと知らないのでは大きな差があるのだ。

そういう事を踏まえて清田は沙耶にそう窺つたのだが、彼女は黙したままだった。やはり、早々と退散するべきだったか。年頃の女の子が、見ず知らずの男に自分の裸の下半身を見られて平気な筈がない。怒りよりも羞恥でどうしていいか解らなくなっているのだろ

うか。尤も、今時の大多数の女子高生は早熟でませていて、何人も
の男との性交渉を持つていているというのも珍しくはない。そういつた
手合いならばそれほど羞恥を抱く事も無かつただろうが、沙耶に限
って性に対して墮落した少女という訳ではないだろう。あの苛烈な
両親の血を引き、それ相応の教育を受けている彼女がそんな好奇心
からのセックスなど自ら進んでやる筈がない。自身の価値を承知し
ているからこそ、自身を安売りする真似など絶対に有り得ない。恐
らく、今時にしては珍しい、貞淑な美少女というのが、清田の沙耶
に対する見解であつた。

長々と清田は思索に耽つていたが、結果として導き出されたのは、
やはり沙耶も恥ずかしいので、早く目の前から消えて欲しいと思つ
ているが、言葉に出せずにいるだけなのだろう。こんな簡単な事を
察してやれない自分の朴念仁振りに清田を辟易としつつ、給湯室を
後にしようとした。

しかし、一步を踏み出した所で、清田の足は止まつた。不意に右
腕を掴まれ、僅かにくいつと後方に引つ張られる。ゆっくりと肩越
しに振り返ると、沙耶が俯きながら、防弾素材のアームガードに覆
われた清田の右腕を掴んでいた。

これはいよいよ怒らせてしまったのか、と清田は内心では身構え
た。沙耶の気性はお世辞にも穏やかとは言い難い、というのは何と
なくだが察しがついている。元々、良家のお嬢様なのだ。一般的
な庶民よりも自尊心は高く、我も強いだろう。家柄に見合う為にはそ
れ相応の人格を身につけなければならないのだ。

「……とう」

小さく、ぼつり、と沙耶の口から言葉が漏れた。声量が小さく、
不明瞭であつた為、何を伝えたいのか解らなかつた。

沙耶が怖ず怖ずと見上げると、清田は小首を傾げ、何を伝えたい
のか理解しかねる、という感情を瞳に表していたので、意を決して

再び口を開いた。

「助けてくれて、ありがとうって言ってるのよ…」

それだけ言うと、沙耶は耳まで赤くして目を伏せてしまった。今の彼女は、コンタクトレンズではなく、シンプルで洗練されたデザイン
の眼鏡を掛けていた。人によってはきつい印象を与えるアーモンド形のぱっちりとした釣り目が、オーバル型の眼鏡フレームの御蔭か、幾分和らいだものを感じられた。

先程とは打って変わって、今の沙耶は随分としおらしく、そして可憐いじらしいしかった。これが、この少女の本当の姿なのかもしれないな、と清田は思った。データでしか知らないが、高城沙耶という少女が背負うものは余りにも大きすぎるのかもしれない。偉大な両親を誇りに思うからこそ、それに見合う娘として振る舞わなければならず、相応の能力と人格を身につけようとがむしゃらで、それが知らず知らずの内に尊大な態度となって顕れているのだろう。父親が右翼団体の首領ともなれば周囲からは畏怖の入り混じった目で見られるものだろうから、それに屈さない強力な防壁を自分で築き上げねばならなかったに違いない。人を寄せつけなくなってしまったのには、それなりの理由があったという訳だ。

先程の沙耶は全身の毛を逆立たせて威嚇する猫のようだったが、今は頭を垂れる従順な子犬のようだった。清田はそんな沙耶を微笑ましく思った。

「いえ、それが自分の務めですから。気にしないでください」

控え目に言った言葉だが、我ながら臭い台詞だな、と清田は思った。

「それと、何処か具合が悪い、怪我等があれば遠慮なくいつて下さ

い。応急処置程度ならば出来ますので」

沙耶はこくりと頷いた。取り敢えず、今の彼女は落ち着いているから、それほど心配しなくても良さそうだ。

他の生存者の様子を見に行こうとした清田だったが、沙耶は依然として彼の腕を掴んだまま離そうとはしなかった。どうしたものかと沙耶を見遣ったが、彼女は暫く黙って清田の腕を掴んでいた。やあつて、顔を上げ、清田の目を真正面から見据えた。その瞳には、先程の弱々しい少女のものではなく、明確な強い意志の輝きが見て取れた。

「聞きたい事があるんだけど、ちょっといいかしら？」

「…答えられる範囲であれば構いません」

嫌だとは言わせない、という強固な意志を言外に滲ませた沙耶の声に、清田は内心で身構え、彼女のあまりの変貌ぶりに困惑していた。

「分かったわ。じゃあ、ちょっとこっちに来て」

沙耶に手を引かれるまま、清田は給湯室の奥まった所まで連れてこられた。こういう場所に引き込んだの話というからには、他人には聞かれたくない内容なのだろうか。沙耶は彼の手を離すと、真正面から向き直った。

「あなたの素性と、目的と、＜奴ら＞についてよ」

「…＜奴ら＞？」

素性と目的を聞かれ、一瞬表情が険しくなりそうな清田だったが、何とか表には出さず、話を若干逸らす為に最後の質問だけをおうむ返しに言った。清田は察した。沙耶が他人に話を聞かれないのではなく、わざわざ自分に配慮してくれたのだ。仮に清田が自身に纏わる事を白状したとしても、それは二人だけの秘密に留めておくという意志の表明なのだろう。だが、迂闊に口を滑らす清田ではない。彼の顔から一切の表情が消え、冷徹な戦争機械そのものとなった。

「歩く人喰い死体の事よ。映画やゲームじゃあるまいし、ゾンビと呼ぶ訳にもいかないでしょ。あんたは自衛隊員なんだから、私達一般市民よりは何か知っているでしょ？」

正直、生ける亡者に関して現段階では何も分かっていない。判明しているのは、彼等に噛まれれば必ず死亡し、やがて同じ血肉を求めてさまよう獰猛な化け物となるぐらいだ。完全にその行動を停止させるには頭部の破壊及び首の切断、肉体を行動不能になるまで損壊させるしかない。つまり、清田も沙耶と同じで大した知識は持ち合わせていなかった。

「現段階では感染者：いえ、<奴ら>に関しては何も分かってはいません。分かっているのは、まあ、噛まれると同じようになるという事ぐらいですね。あと、感染者と呼んでいるのもあくまでその病理現象が感染症のようであるからであって、この症状を発現させる細菌やウイルスが具体的に発見された訳ではありません」

「つまり<奴ら>に関して知っている事は、あんたも私達も大差がないってことね。ま、いいわ。<奴ら>の発生の原因を知ったところで私達にはどうする事も出来ないし…それで最初の質問に戻るけど、あんたの素性と目的を教えなさいよ」

先程の可憐しい少女の面影は消え失せ、今の沙耶は射るような厳しい眼差して清田を睨みつけていた。

フェイスマスクに隠された清田の表情は少しも窺い知れない。唯一露出しているその瞳にすら、爬虫類のように何の感情も浮かんではいなかった。沙耶にはそれが気に食わなかった。幼少の頃から、屋敷に出入りする両親の部下などの身の回りにいる大人は自分に傅き、類い稀なる才媛故に同世代は言うに及ばず、教師からも一目置かれていた。決して自惚れている訳ではないが、沙耶は自身を客観的に評価した上で根拠のある傲慢さを誇示していた。自慢の両親とその娘である自分は生まれながらの才能に恵まれ、またそれを伸ばす為の努力も怠ってはいない。私は凄い。私は偉い。自慢じゃないが、それが純然たる事実なのだ。なのに目の前の男は、これっぽっちも自分の事を歯牙に掛けてすらいないのだ。沙耶にとっては面白い筈がない。自身の能力に纏わる事に関して清田は知りようがないのでそれは譲ったとしても、この美少女といっても差し支えない容貌にこれといった興味を示さないのが、沙耶の女としての自尊心に傷を付けられたというのもあった。おまけに、失禁を見られ、尚且つその後始末の現場まで見られている。確かに、彼は命の恩人だが、だからといってその行為が気分を害さないという訳でもない。それとこれは全くの別問題だった。

沙耶は些か自分自身が感情的になつて自覚していたが、心の一部分が理性の制御から外れていた。理由などどうでも良かった。泰然としている目の前の男の、多少なりとも狼狽した姿を見たという嗜虐心が鎌首を擡げていた。ジョン・ウェインに代表される、銃を身に帯びた姿こそが男らしいという欧米的な男根主義思想の実体であるかのような清田を、言葉で虐めてみたかったのだ。

沙耶自身も気付かぬ内に、その深層心理では、目の前に現れた、この場にあつては市民を守るのを当然の義務とする自衛官である清田に鬱憤のはけ口を求めてしまっていた。普段の彼女からすれば、

他人に当たり散らすという行為は唾棄すべきものだが、やはりこの生死の掛かった極限状況下では無意識の内にそういった対象を求めてしまったのだろう。どういった形であれ、人は何よりも自身の平穩を優先する。幼稚なストレスの矛先を向ける適当な相手がいれば多少なりとも安らかになれるものだ。

「…自分は自衛官です。ここには生存者の救出に」

「それが嘘だっという事が分からないほどこっちは馬鹿じゃないわよ」

氷のように冷たい声音で、淡々と沙耶は遮るように言った。先程まで従順な子犬のようだった少女の口から発せられた言葉とは到底思えなかった。

「平野：あのデブチンが言ってたわ。あんたが百歩譲って自衛官だとしても、恐らく、普通の自衛官じゃないって。あんたのその過剰な装備が何よりの証明じゃないの？ 確か、あんたの部隊は、特殊作戦群っていう極秘の秘密部隊なんですよ」

あくまで沙耶は淡々としていたが、その胸中は鼠を遊び殺す猫そのものだった。追及して下さいと言わんばかりに様々な材料をぶら下げている清田は幾らでも料理の仕方がある。先程、自分の様子を見に来た耕太から齎された情報と推測は、彼のその膨大且つ深遠な軍事知識に基づいているだけあって無駄なく合理的なものであり、軍事に疎い沙耶ですら納得のいくものであった。清田は多少なりとも動揺していた。過剰ともいえる重武装と重装備で全身を固めた物々しい姿が与える印象は、確かに素人にも清田が一目でただ者ではないという事が解るだろう。自身の正体が露見するという可能性が全くのゼロだとは思っていなかったが、まさか、たかが高校生に

その正体がばれるとは思ってもみなかったし、同時に己の今後を危ぶんだ。

見えないテロやゲリラとの戦いでは、正体が明らかになつたらその時点で戦わずして勝負は決している。相手を先に探知した方が圧倒的に優位に立つのは常識だ。テロリストやゲリラを、隙あらば寝首を掻いてでも容赦なく殺す特殊部隊の兵士は、その存在自体が彼等にとつては天敵である。エリートフォースの男達は、絶えず不穏分子を監視し、追跡し、不正規戦を仕掛けるテロリストを、不正規戦によって制するのだ。故に彼らがテロリストのブラックリストに載るのは避けられない。彼ら自身は元より、その家族や親交のある者にすらテロリスト達は容赦しない。少しでも報復できるのであれば、一般市民を巻き込むのも辞さない、だから彼らはテロリズムに走るのだ。そういった事態を避ける為に、特殊作戦に携わる男達はその存在を必要以上に秘匿する。それらが彼らを守る唯一の手段だからだ。たとえ話したとしてもそういった可能性が全くの皆無であろうと、自身の正体についてべらべらと喋る奴はいない。そういった者は高い秘匿性を求められる特殊作戦では使い物にならないと見做されるからだ。故に清田は先程、耕太に名前を偽って告げていた。高校生に正体を言い当てられるようでは、いざ対テロ作戦に従事する際に自分は使い物にならないのでは、と清田は思わずにはいられなかった。

「何処も彼処もく奴ら>だらけで、この学校と同じような状況となつている場所は幾つもあるのに、敢えて此処にやってきたのにはそれなりの理由があつて然るべき。ただの人命救助だなんて嘘っぱちでしょ」

この状況と、特殊部隊の性質を知っていれば、自ずと答えは導き出される。但しそれには、耕太のような軍事オタクがこの場においてこそだろう。そして彼は清田の正体に感づいていたとしてもわざわざ

ざそれについて言及しなかつただろう。特殊部隊の男達が最も嫌っている事が、自身の正体が露顕するという事を知らぬ筈がない。どうしても清田にはそれが理解出来なかつた。耕太はそれを承知している筈なのに、わざわざ沙耶にその事を話した。今は余計な疑念を抱かせるべきではない。それが団結を阻害する可能性があるというのにならぬ。ただ単に、耕太の考えがそれほど回らなかつただけなのかもしれない。所詮は高校生という訳か。

いよいよ清田は居心地が悪くなってきた。このような思いは、特殊作戦群の選考検査の最終試験である口頭試問以来だつた。清田はその試験に於いて、剣崎群長を始めとした本部幕僚達が勢揃いした目の前で罵倒され、精神的に痛め付けられた。自分がこれまでこなしてきた全てを否定され、究極の自己否定の波が押し寄せる中で、それをまた自ら口にする事を要求された。今の状況はまさにそれだつた。決して公にしてはならない己の存在を、自ら口にする事を要求されている。口が裂けてもそんな事は言えない。言ってしまうえば、今まで積み重ねてきた全てを、自分から殴り捨てるようなものなのだ。それは、特殊作戦群の一員となる為に人生を彩る多くものと決別してきた自分を裏切る行為であり、清田の魂は血の叫びを上げて拒否している。そもそも、女子高生に自分を強要されているという状況には軽い眩暈を覚えずにはいられなかつた。何処の世界に、女子高生に詰問される特殊部隊の兵士がいるのだ。そのような兵士は、恐らく、自分が世界で初めてだろう。そもそも、文字通り小便臭い餓鬼の戯言なぞに生真面目に付き合う必要はない。適当にはぐらかせばそれで済む筈なのに、清田は上手いカバーストーリーが思い付かなかつた。

理由は解らなかつた。この少女に見詰められると、何故か洗いざらい吐き出してしまいたい衝動に駆られ、胸に得体の知れない甘い疼きを覚えるのだ。

俺は、マゾだともいうのか 苦痛に親しんできたからこそ、清田はある意味では真性のマゾヒストと言えなくもなかつた。己の命

を投げ出すのも辞さない覚悟を求められるエスの一員は、どんな無理難題な命令にも従い、その遂行を求められている。苦痛と困難を愛している？からこそ出来る芸当である。特殊部隊の兵士は、皆自覚がないだけのマゾヒストであり、命令され支配される喜びを無意識の内に感じているのだ。一回りも年下の美少女に問い詰められているという、倒錯的ですからあるこの状況に、本人の心が与り知らぬ所で少なからぬ興奮を覚えていたのだ。

「さて、反論の余地があるのならばどうぞ御自由に：まあ、あなたの口から何も言える訳がないわよね」

しかし、この問題はあっさりと沙耶が引き下がる事で決着した。厳しい顔から一転して、彼女は表情を和らげ、肩を竦めて見せた。

「平野から色々聞いたけど、そういつた部隊の兵士は自分の事や部隊の事なんて決して明かす事は出来ないものなんですよ？ 端からあなたの口から語られるだなんて期待してないわよ。私も意地悪くあなたに言っただけど、無理に言う必要はないわ。今、大切なのはあなたの素性や目的よりも、協力して脱出する事だもの。但し…」

不意を突いて伸ばされた沙耶の手が襟を搦め捕り、体重を掛けて体勢を崩されが、清田はすんでのとこで堪え、若干前のめりになった。真正面から沙耶に眼を覗き込まれていた。触れそうになるほど間近に迫った沙耶の、凄みを帯びた瞳に、思わず気圧される。

「根っからあなたを信頼している訳じゃないからね。それを、忘れないで」

沙耶の慎ましやかな口許から、一言一言が囁かれる度に彼女の吐息がフェイスマスク越しに感じられた。甘い痺れにも似た悪寒が背

筋を走り、腰骨の辺りがざわついた。清田は自分の心のその反応が信じられなかった。十代半ばの、それも一回り以上も小柄な少女に、凄まれて？喜んでいる？なんて！

「これで私の話はおしまい。とつと他の人の面倒でも見てきなさいよ」

沙耶は手を離し、身を引いてそう言った。先程の雰囲気から打って変わって、今度は何処にでもいる、普通の女子高生のものであった。清田は暫し、狐に摘まれたような顔で沙耶をじっと見た。ころころと表情と雰囲気を一変させる彼女が、いまいちよく解らなかった。

「…なによ。私の顔に何かついてるっていうの？」

沙耶が、無言で立ち尽くす清田に怪訝そうな表情を浮かべたので、彼は慌てて給湯室から退散した。これ以上、豹変しやすい沙耶を刺激するのは得策とは言えない。やはり、彼女は精神的に不安定と見做すのが妥当だろう。一行の中では注意深く目を配ってやる必要があると清田は胸に刻んだ。

「何処か、具合が悪いというのはあるかな？」

清田は、次に女子生徒の様子を窺った。この生存者達の中で、その静謐な美貌とは裏腹に、肉体的にも精神的にも最も頑健なのは彼女であると思っ込んで間違いないだろう。凜々しい顔立ちは涼しげで、大して疲労した様子もなく、教職員の椅子に座って清涼飲料水で喉を潤していた。

「いえ、私は大丈夫です。それよりも、鞠川校医の体調があまり優れないご様子ですが…」

女子生徒の言葉通り、その隣で机に突っ伏している女性 机の隅にあるネームプレートには【校医：鞠川静香】と書かれていた は、確かに、先程よりも具合が悪そうだ。

「君も何かあれば言ってくれ。その為に俺はいるんだからな」

そのように清田は念を押し、静香の傍による。

「具合はどうですか？」

そう呼びかけてみたが、先程の妄想の残り香の為か、清田は己の内面に深い羞恥を抱いた。思わず、顔を俯かせ、視線が足元を彷徨う。それが、タイトスカートが大きく破かれて露わとなった静香の白い太腿と、高級そうな紫紺のレースの下着を目にする結果となり、純朴な青年の心を責め苛んだ。

「…どうして、私達はへりに乗れなかったのですか？」

少しの間を置いてから、静香は、突っ伏したまま清田に尋ねた。心なしか、その声にはやるせなさど憤りが感じられた。事情を知らない彼らからすればその質問をぶつけたくなるのは当然だろう。

清田は暫し、これから告げる内容を躊躇ったが、どの道納得しようがしなかるうが、動かぬ事実である事に変わりはない。

「この陣容で、感染者…ではなく、＜奴ら＞の集まる屋上を目指すのは危険と判断したからです。その数は膨大で、武装した一個分隊でも苦戦するほどのものでした。そこへ非武装の民間人を連れていけばどうなるか…：簡単に想像はつくと思います。まあ、何名かは

この修羅場を自力で潜り抜けられたようですが…」

ちらり、と清田は女子生徒を見遣った。

「毒島冴子です。剣道部で主将を務めております」

その視線に気付き、簡単な自己紹介をして軽く会釈をする女子生徒 冴子の、毒島という珍しい苗字に清田は思い当たる節があった。以前に、特殊作戦群に講演の為に招いた、海外でも高名なある剣術師範の苗字が毒島といい、その一人娘は高校生でありながらかの千葉佐那子にも勝るとも劣らぬ剣の腕前と記憶していた。

成る程。それならばこの修羅場を木刀一本で潜り抜けられたのも納得がいく。そして同時に、世間の狭さに驚きを隠せなかった。

「全員が全員、毒島さんのような実力を持っている訳でもなければ、自分のように銃火器で武装している訳でもありません。そして何よりも…」

沙耶のいる給湯室を見遣り、そして机に突っ伏す静香の薄い背中に告げた。

「先程の高城さんの精神状態と、著しく体力を消耗した鞠川先生を連れていくのは余りにも危険と判断したからです」

清田の率直な物言いに静香は、突っ伏したままぴくりと身体を震わせた。

「…へりに乗れなかったのは、私と高城さんの所為なの？」

腕に埋めていた顔を僅かに擡げ、静香はどんよりとした瞳で清田

を見上げた。それは光の消え失せた、絶望に染まり諦観した眼だまひつた。学園から脱出できず、更にその原因が自分にあるような事を言われ、おっとりとした人柄である静香の胸中も流石に穏やかという訳にはいかなかった。

「それも一つの要因である、と考えてはいますが、必ずしもそれが全てではありません。数々の要因が重なった末に、現在の状況下に置かれていると思って下さい。貴女方二人だけの所為では決してありません。自分が単独ではなく、仲間と此処に来ていれば、へりを目指す事も可能でした。そして…」

未熟な自分ではなく、経験豊富な先輩隊員なら、もっとまじな言葉をかけてやれただろう。清田は言葉を紡ぐ中で、ただひたすら自分の不甲斐なさを悔やんでいた。

「今、重要なのは、過去を悔やむよりも次に向けて思考を切り替えていく事です。その為には全員が冷静になり、落ち着いて行動しなければなりません。それが、集団の生存率を高めます」

規律と統率を失った集団が、砂上の楼閣よりも崩壊しやすいのは歴史で何度も証明されている。十分に訓練された軍隊ですらそうなるのだから、素人ともなれば言わずもがなである。自分が先ず最初にやらなければいけないのは、化け物を吹き飛ばす事ではなく、生存者達を落ち着かせ、冷静な判断をさせられるようにする事だと清田は自覚していた。

「それに…自分は、貴女達を無事に安全地帯まで送り届ける為に残りました。どうか、自分を信じてください」

清田は膝を着き、静香に目線を合わせてそう言った。

その言葉に偽りはない。当初の目的は高城沙耶の身柄の確保であったが、可能であれば他の生存者の救出も念頭に置いて行動していた。今は、この四人を必ず守り抜き、無事にこの地獄から脱出させる事を固く心に誓っていた。でなければ、今まで血反吐に塗れて行ってきた訓練の全てが無駄になってしまう。任務の完遂は、単に己の義務を果たす為だけではなく、自分が自分である為に必要な証明に他ならなかった。清田の真摯な想いが通じたのか、静香は突っ伏していた机から半身を起こすと、ゆっくりと頷いた。今、この場で清田を責め立てても全くの無意味であり、自身の鬱憤を晴らしたとしても特に有意義な事ではない。それに間近で接して解ったのだが、目出し帽から僅かに露出する清田の目元が思った以上に若く、その瞳は大人しい獣のような、大きなジャーマンシエパードのような可愛さがあると感じていたので、静香は彼に当たり散らす気にもなれなかった。清田という男の素性は不明だが、その人となりは責任感の強い若者である事が察せられた。

「それで、あなたの気持ちは解ったけど、これからどうするの？
勿論、何か考えがあるんでしょうね」

不意に背後から掛けられた声に立ち上がって振り向くと、沙耶が腕組みをして佇んでいた。写真通りの強気な瞳を見て、精神状態は安定していると見做して問題ないだろう。

「新床第三小学校を目指します。現在、床主市全域で大規模な避難計画が立案されています。指定された避難場所からへりで民間人を順次脱出させ、安全な地域へ空輸するというものです。その指定避難場所の一つに新床第三小学校があり、そこが此処から一番近い避難場所でもあります」

「それでどうやってそこまで行くつもり？ 歩くのは嫌よ」

歩かせるつもりなど毛頭なかった。清田は、冴子を除いた全員に強靱な体力など期待してはいない。

「車を使いたいと考えていますが…」

職員室ならば、教職員の誰かしらが通勤で使う車の鍵があるだろうと考えたが、仮に鍵があったとしてもどの車のものなのかまでを判別する方法は、いちいち車に鍵を刺して確かめる以外にない事に気付き、些か現実的ではないという結論に至った。行き当たりばったりな自分に清田は愕然とした。

「車なら私を使いましょう」

静香がそう申し出た。その言葉に清田は幾らか救われた気持ちになった。

「それならば歩くよりも安全で速く移動できるものね」

体調も回復し、新たな脱出の可能性がある事を清田から告げられたからか、静香は先程よりも気を取り直した様子だ。プラダのハンドバッグの中から鍵を探し出そうとこそとやりだした。

「ところで鞆川校医、それは全員を乗せられる車なのか？」

「うっ…」

冴子の問いに対し、静香はバッグを漁る手を止める事で答えた。静香が所有するコペンでこの人数を乗せるのは難しく、特に清田のような大柄な人物には相当窮屈だ。

「無理…かも」

「それならば部活遠征用のマイクロバスはどうだ？ 壁の鍵掛けにキイがあるようだ…」

冴子は職員室内を見回し、学園が所有する二台のマイクロバスのキイがまだ壁の鍵掛けにある事を確認してから、そう提案した。剣道部の遠征で幾度も使用した経験があったからこそその閃きだった。

「まだ、あります」

耕太が窓辺に寄り、駐車場にマイクロバスがあるのを確認した。

「それでは、移動にはバスを使いましょう」

清田は鍵掛けからマイクロバスのキイを一つ取り、キーホルダーとして付いているタグに書かれた数字を確認した。それはマイクロバスのナンバープレートの数字で、清田は窓辺に寄り、並んで駐車してあるバスの後部に双眼鏡を向けた。手に取ったキイは、手前に駐車してあるバスのものであった。

「鞠川先生、運転をお願いします。車番は42-39です」

「車番？」

「あ…車のナンバーの事です。手前に停まっている車両です」

うつかり口に出してしまった自衛隊用語に静香は不思議そうな表情を浮かべたので、清田はすっかり骨の髄まで染まりきった自分に嫌気が差しつつ、彼女にキイを渡した。

「あの、一ついいですか？」

手を挙げ、耕太が怖ず怖ずと申し出た。

「避難所に向かう前に、家族の無事を確かめませんか？ 僕の両親は外国にいるのでその必要はありませんけど、やっぱり家族の事が気になる人もいると思うので」

ちらり、と耕太は清田の顔色を窺った。清田はその提案を了承するべきかどうか迷った。耕太の、他人を気遣える優しさを無下にしたいわけではないが、それが全員の命を危険に晒す可能性が無いとも言えない。家族の安否を確かめようとして自分達が危機に陥っては本末転倒であり、また確認しに行っても出会えるとは限らない。家族は家族で別の場所に避難しているかもしれないので、この行動が全くの無駄となる恐れがあった。それかもしくは既に犠牲となり、歩く亡者と化して血肉を求めているのかもしれない。

暫く考えた末に清田は、黙って頷いた。血も涙もない野郎と思われたくはない。それに自分の安全を優先すべきという選択も間違っではないが、家族を助けたいと思う人間として当たり前前の感情こそ、この状況下では大切にすべきだろう。

「決まりのようですね。しかし私も平野君と同様にその必要はありません。家族は父一人で、今は国外の道場にいます。心配ですが確かめようがありません」

「私も大丈夫。もう両親はいないし、親戚も遠くだから」

冴子と静香の申し出を受けてから、清田は沙耶に目を遣った。

「私の家は御別橋の向こうよ。多分、パパもママも無事だと思う。」

「そう簡単に死ぬような人たちじゃないし」

両親の事は多少なりとも心配だが、沙耶はそれほど不安に思っていない口ぶりで言った。沙耶の両親の素性については、事前に剣崎から知らされていた。父親はこの県の国粋右翼団体の首領、母親は若い頃からウォール街では有名なトレーダーとして活躍していたらしい。そんな両親を持つ沙耶の出自には驚きを通り越して何処か別世界に住まう天上人のようで、青森の片田舎で育った庶民の清田は思わず呆れてしまいそうだった。

「それでは、当初は高城さんの家に向かい、その後に避難所を目指すという事でよろしいですね？」

清田の言葉に一同は頷いた。当面の計画はこれでいいだろう。具体的な目標があればそれに対して全員が一丸となって行動する事が出来る。危険なのは、抽象的な目標を設定する事だ。闇雲に動き回ってしまい、状況を悪化させる可能性がある。いつまで経っても目に見える結果が出せないと息詰まってしまう、それが士気を下げってしまう原因となる。

「ところで、またへりで迎えに来て貰うっていう選択肢はないの？無線機ぐらい持つてるでしょ」

沙耶が、疑問を差し挟んだ。事情を知らない彼等からすれば、その方が安全だと考えるだろう。清田が先程の無線のやり取りを話すと、沙耶はそれで納得したようだ。

「それと蛇足ですが、自分が装備している無線機は交信距離が非常に短いものです。流石に遠方の司令部と連絡を取り合う事は出来ません」

清田が左脇腹のポーチに携行している個人用無線機はあくまでも隊員間同士での交信が目的であり、遠方の司令部と交信するならば浜岡が背負っていたマンパック型のように高出力でなければならぬ。もしくは、米軍のように衛星電話を持つていれば良かったのだが、生憎と特殊作戦群も防衛予算縮小の煽りを受けており、なかなか便利な装備を調達できないでいた。

「へえ…意外と役に立たないのね」

それを聞いて沙耶は残念そうに呟いた。もしも清田ではなく、この場に通信担当の浜岡がいれば状況は少し違ったかもしれない。逐一、推移する状況を知る事が出来れば、わざわざ新床第三小学校を目指す事なく、もつと単純簡便な方法が見付かるのかもしれないが、仮定の話にしても意味がない。

それに清田は、浜岡の大型無線機とは違い、大量の武器弾薬と爆薬を満載したデイパックを背負っていた。無駄撃ちをしなければ充分過ぎる量だ。そして極め付けが、パックの横に括り付けてある、長大なポーチの中に収めてあるアルミニウムとグラスファイバー製の筒だった。清田の装備はその気になれば戦車すらも撃破可能といっても過言ではない。それが二本、左側のポーチに収まっている。正直、この任務でこれは過剰な装備だと考えていたが、いざとなったらこれ以上に頼れる火力はなかった。

「概ね、今後の行動については纏まりましたね」

清田がそう締め括ると、一行は何時でも行動できるようにと身支度を始めた。清田も、槓棹を引き、排莖口から弾き出された銃弾を手で受け止め、小銃から弾倉を取り外して異常の有無を確かめた。装填してあるマガグにはまだたっぷりと弾薬が込められている。弾

き出した弾薬を込め直してから、弾倉を小銃に叩き込んだ。

「行動する前に何点か。先頭は自分が進みます。左側面は平野君、右側面は毒島さん。自分の後方を鞠川先生、高城さんの順番で行きます」

< 奴ら > を退けられる武器を持っている者が前面に出て、その後非力な者が続くという陣形は当然だろう。そして、耕太に左側面の警戒を担当させたのは、清田は右利きである為、自ずと左の脅威に対して銃を向ける場合は僅かに遅れるからだ。実銃と比べるまでもないが、曲がりなりにも飛び道具を有している耕太ならば左から接近する脅威を比較的速度やか且つ安全に排除できるだろう。右側面に配した冴子には、撃ち漏らした脅威を白兵戦で排除して貰う為だ。清田は左よりも右の脅威に対して強いので、そうなる可能性は低い。万が一という事を考えての保険だった。

「あと、可能な限りエンゲージ：交戦は避けて下さい。今は、スピードが命ですから」

それが済むと清田は封鎖された引き戸の前までやってきてバリケードを退かし始めた。生存者達も彼を手伝おうとして加わる。あっという間にバリケードは撤去され、鍵を解き、清田は音を立てないように戸をそろそろと開いた。

廊下には < 奴ら > が二体いるだけだった。清田は据銃し、サイトを通過して狙いを定め、引き金を引いた。押し殺された銃声が二度響き、蹴り出された薬莢が床を跳ね転がる。肉の叩き付けられる音が職員室まで聞こえてきた。

それが有無を言わさぬ、行動の合図だった。

1 s t d a y ?

踏み出した一步は粘り着くようで、腕に抱えるフルカスタムのM4カービンがとてつもなく重い代物に思えた。実際、清田が使用するM4カービンは様々な装備を追加されている為に通常のものよりも重量がある。だがそれは、日々の訓練と自己の絶え間無い錬成のお陰でしつかりと保持する事が可能な筋力を身につけていたのさほど苦にはならない筈なのに、今は腕に力が入らない気がした。

恐らく、原因は、四人の民間人を無事に守り切らなければいけないという精神的な重圧によるものだろう。今まで様々な訓練を経験し、あらゆる事態に対応可能なように能力を身につけた筈だったが、このような状況は全く異質だった。どんなに危険な訓練でも常に傍にいたのはエスの仲間達だ。彼等の技量は高く、肉体的にも精神的にも自分より優れている隊員は大勢おり、たとえ死と隣り合わせとなっても全幅の信頼を寄せる事ができた。それが今では、清田は孤立無援の状態で凶暴な人喰い死体が闊歩する中を横断しなければならぬのだ。勿論、様々な想定に基づいた訓練の中に、敵中に於ける単独での破壊工作活動や戦闘行動等があったが、民間人の護衛は未経験だ。だが、やらねばならない。泣き言など言っても仕方がないし、言うつもりも毛頭なかった。

先程、二体の<奴ら>を撃ち倒したきりで、何ら障害に遭遇せず階段を下りて正面玄関まで到達できた。清田を先頭に、生存者達はなるべく音を立てないようにして靴箱の陰に隠れた。清田は重装備を纏っているの、敷いてある簀の子をうっかり踏んで音を立てないように気をつけた。普段よりも重くなっている清田が踏めば、簀の子の板材が音を立てて軋んでしまうからだ。

正面玄関には、数えるのも嫌になる程の<奴ら>が犇めいていた。無論、視界に収められる範囲ばかりにいるとは限らない。目に見えない場所にも、もっと多くの<奴ら>がいると想定して行動するべ

きだろつ。一発でも撃てば、忽ち群がられて喰い殺されるのが目に見えていた。交戦を避けて通り抜けなければならぬ。それは不可能な事にも思えたが、そうしなければ生き残れないのであれば、そうするより他にないのだ。

「見えてないから、隠れる必要なんてないのに」

沙耶がぼつりとそう言ったが、自身も靴箱に隠れながらの発言を見る限りでは、彼女も己の推論に確証が持てないのだろつ。しかし、<奴ら>の群れの中を一切の音を立てずに突破した清田は、身を以つてそれが正しい事を知っていた。

腰のユーティリティポーチから伸縮ロッド付きの鏡を取り出し、下駄箱の陰から様子を窺う。<奴ら>に視覚が無いとはいえ、やはり身体を不必要に曝すのは抵抗があるし、必要以上に動けば物音を立てる可能性が高くなると考慮しての行動だった。正面に両開きのガラス戸が見えたが、その通路には数体の<奴ら>がたむろしていた。銃にせよ刃物にせよ素手にせよ、排除しようとするれば少なからず音を立ててしまうので忽ち群がられるだろつ。完全なるサイレントキリングは不可能だ。

現状では正面玄関を通り抜けるのが最良の選択だった。校舎内を移動し、別の出入口から外に出るという方法もあったが、それは清田だけならまだしも、生存者を連れていくとなると厳しかった。空間の限られた建物内では<奴ら>に囲まれた際に退路を絶たれる可能性が高く、人数が多ければ尚更だ。だからこそ機動の制限を受けにくい屋外ならば仮にそうなたとしても切り抜けられる可能性がある。そして駐車場に停まっているマイクロバスを指すとなると、やはり正面玄関を抜けた方が近いというのもあった。

「私が先に行きましょうか？」

冴子がそう申し出たが、それをあつさり承諾する清田ではない。彼女が若くして剣に熟達していたとしても、？非力？な女子高生に一番危険な前衛ポイントマンをやらせる事など出来る筈が無かった。こういう時だからこそ、自分が役に立たねばなるまい。その為の特殊作戦群なのだから。でなければ諸々の手当が付いて、一般隊員よりも倍近く支払われている給料の意味がない。

「いや、自分が行きます。貴女はいざという時の為に控えていて下さい」

清田の言葉に冴子は無言で頷いた。冴子は、決して自惚れではないが、剣術に関する腕前には自信があつた。しかし、？戦闘？に関しては、少なくともこの中の誰よりもプロフェッショナルである清田の言葉とあつては素直に従う他ない。彼の事は、？人を効率よく殺す方法？を骨の髄まで叩き込まれている戦士と見做していた。

行動を起こす前に、清田は？戦術的呼吸法？を実施した。人体は、体性神経系と自律神経系を通じて脳が動かしており、前者は腕を上げたり小石を蹴ったり、後者は人が意識的に動かす事の出来ない心拍数や発汗などを担当している。しかし、呼吸と瞬きだけは何時でも体性神経系と自律神経系の制御を簡単に切り替える事が可能であり、それは人が眠る際に呼吸を意識的に行わなくても窒息せずに済む事で証明されている。つまり、呼吸は体性神経系と自律神経系の懸け橋であり、呼吸の制御を身に付ければ完全とはいかないがある程度まで自律神経系の動きを自らの意志でコントロール可能となる。そして自律神経系には交感神経系と副交感神経系の二つがあり、適切な呼吸法を行えば交感神経系による反応、いわゆる恐怖と怒りの手綱を握る事が出来る。それはほんの少しの心構え程度のものかもしれないが、あるのとないのとは雲泥の差がある。

清田はフォーカウント法を好んでいるのでそれを実施した。まず、ゆっくり四つ数えながら鼻から息を吸い、腹を風船のように膨らま

せる。そこで息を止めて四つ数え、またゆっくり四つ数える。今度は口から息を吐き、空気の抜けた風船のように腹をへこませる。息を吐ききったところで、息を止めてまた四つ数えたら、この手順をまた最初から繰り返す。これを三度繰り返すと、緊張が解れ、精神状態が落ち着いてくるのが分かった。古典的なオペラント条件付けにより、その効果はより高められていた。呼吸という一つの動作に集中する事で、無駄な雑念が消え失せるようだった。

そうだ。何事も先ずは落ち着け。そうすれば上手くやれる。重装備を身に纏い、決して身軽とはいえない状態でも？流水の如く淀みのない？動きで、清田は音もなく下駄箱の陰から進み出た。通路上には数体の＜奴ら＞が、声にならぬ呻きを上げ、ゆらゆらと海草のように揺れながらぼんやりと佇んでいた。どれもこれもが無惨な最期を遂げてもお、安らかな死を迎えられなかった生徒だった。

心が今にも悲鳴を上げそうだった。彼らの事や、その家族の事などを思うと痛ましい想いで胸が張り裂けそうだった。だが、今はそんな事を気にかける事すら許されない。感情を押し殺し、清田は＜奴ら＞の眼前をそよ風のように過ぎった。平静を装っているが、清田とて恐怖は感じていた。しかし、それらは事前に行った戦術的呼吸法のお陰で抑制されていた。＜奴ら＞は、鼻先にいた清田に気付く素振りさえ見せず、ただ呆然と虚空に視線を漂わすだけだった。

足元に落ちていた、誰かの脱ぎ捨てられた靴を手に取り、奥の壁際の傘立て目掛けて投げると、命中し、盛大に音を発した。今まで無反応だった＜奴ら＞は、一斉にそちらを気怠げに振り返ると、覚束ない足取りで歩み出した。清田は隅に寄り、＜奴ら＞が通り過ぎるのを待った。

玄関内の＜奴ら＞が音を立てた傘立て周辺に集まったのを確認し、蝶番が軋まないように慎重にガラス戸を開いた。そこからでも、外には遙かに多くの＜奴ら＞がいるのが確認されたが、今はそれについて考えるべきではない。思考を分散させると集中力の低下に繋がる。重要なのは、取り敢えず生存者を校舎の外へ連れ出す事だ。

清田は冴子に合図を送り、周辺の警戒に取り掛かった。生存者達は極力音を立てないようにゆっくりと慎重に進み、清田の先導で正面玄関から外へ出た。

外にうごめく途方もない数の<奴ら>は壮観でさえあり、絶望するには充分過ぎた。生存者達の反応は様々だったが、年相応以上の冷静さを身に付けているだろうと見做していた冴子でさえ、思わず息を呑むのを清田は見逃さなかった。

清田は手招きし、生存者達を自分の背後で固まらせてその場にしがみ込むように指示した。

「耕太君」

清田は小声で耕太を呼んだ。耕太は中腰で清田の背後までやってきた。

「何でしょうか？」

「デイパツクの背面にグレネードポーチが沢山括り付けられているだろう？ 最上段のポーチから手榴弾を二個、取り出して俺に渡してくれ」

清田の指示通り、耕太はデイパツクに括り付けられたグレネードポーチから二個の円筒形の手榴弾を取り出し、彼に手渡した。耕太にはその特殊な形状の手榴弾がどのようなものであるのかを察した。

「これから大きな音を出して<奴ら>を誘導します。全員、その場にしゃがんだまま耳を抑え、爆発を見ないようにしてください」

生存者達は素直に清田の言葉に従い、手で耳を抑えてその時を待った。全員が指示に従ったのを確認してから、清田は右手で保持し

ている手榴弾の、何かに引つ掛けたりして抜けないようになってい
る安全ピンの割りを戻してから、左手の人差し指を安全ピンのリン
グに通し、引き抜いた。映画のように手榴弾の安全ピンを口に咥え
て引き抜こうとすれば、歯が何本か抜けるだろう。それ程までに手
榴弾の安全ピンは固く抜け難くなっているのだ。今、手榴弾は右手
で弾殻ごと握り締めている安全レバーにより遅発信管が撃発されな
い状態であった。

清田は渾身の力を込めて手榴弾を投擲した。思わず雄叫びを上げ
そうになったが、それは学生の頃やっていた陸上競技で染み付いた
習慣だからだろうか。回転しながら放物線を描く手榴弾から安全レ
バーが弾け飛び、解放された撃針によつて遅発信管が点火された。
手榴弾は清田の狙い通り、進行方向上にたむろするく奴らくから離
れた場所に落下した。

手榴弾の爆発に備え、距離があるとはいえ、清田もその閃光と音
響から目と耳を庇った。直後、昼間の最中にあつても網膜を焼く2
40万カンデラの超新星のような煌めきと、ジェットエンジンが間
近で発する轟音よりも大きな180デシベルという爆音が轟いた。

スタングレネード
特殊音響閃光手榴弾と呼ばれるこの手榴弾は、爆発時の凄まじい
爆音と閃光により、付近の人間に一時的な失明、眩暈、難聴、耳鳴
り等の症状と、それらに伴うパニックや見当識失調を発生させての
無力化を狙つて設計されている。威力の逃げにくい閉鎖空間内で使
用した場合、どんなに鍛え込んだタフガイでも思わず顔を覆つてう
ずくまる程の代物だ。たとえ空間の開けた屋外で尚且つ距離があつ
たとしても、その閃光と爆音は少しも減衰する訳ではない。離れた
場所で耳を覆っていたのに、痛む鼓膜に清田は思わず顔をしかめた。
清田の目論見通り、マイクロバスへと至る進路上にいたく奴らく
はスタングレネードの発した轟音に釣られて歩き出していた。く奴
らくどのれもが、その威力に怯んだ様子はない。ただの大きな音と
しか捉えていないようだ。進路上のく奴らくの姿が疎らになり、且
つ大音響に引き寄せられた新たなく奴らくが集まるより前に、清田

は生存者達に移動を促した。

「さあ、行きましょう。今が一番、障害が少ない」

清田を先頭に一行は移動を開始した。清田は予備のもう一つのスタングレネードをポケットに挿込み、<奴ら>の間隙を縫って生存者達を先導した。

途中、清田らの存在に気が付いた<奴ら>が数体いたが、近付いてこようとすると奴らにはその頭に灼熱の弾丸を撃ち込んで清田が尽く無力化していった。

清田はハリウッド映画のアクションヒーローのように曲芸じみた射撃は出来ないが、戦闘で生き残ったプロの兵士達が実践していた堅実な射撃術を身につけており、少しも撃ち漏らす事は無かった。しっかりと左手で銃身下部に装備された擲弾発射器を支え、右手で小指から順に握把を握り締めながら肩付けを行い、右腕を引き締め、真正面からACOGサイトの上部に据え付けられたホログラフィックサイトを覗き込み、引き金は優しく真っ直ぐに引き、呼吸は静かに吐き出した。少しでも身体のぶれを軽減する事が命中率を向上させるのだ。自身が移動しながらで、尚且つ標的も緩慢とはいえない動いているとなれば近距離でも外す可能性は高い。だから清田は、生存者達に被害が及ばないと思われる距離にまで接近してきた<奴ら>のみに的を絞り、最小の銃撃で迎え撃っていた。

冴子と耕太の出番は無かった。勿論、清田は彼らを最初からあてになどしていなかった。確かに、二人は<奴ら>に対する有効な武器を保有し、事実それを用いて今まで生存してきた。だが、民間人を救出に来た現役の特殊部隊の兵士が、専門的な訓練を受けていない彼らの戦力をあてにしろという事自体がありえなかった。スペシヤルフォースの男達は、同じ苦しみと困難を分かち合った仲間にか背中を預けない。むしろ、預けられないというべきだろう。特に、咄嗟の判断力を要求される屋内近接戦闘に於いてはそれが顕著であ

る。部屋をクリアリングする際、チームの各人には役割が付与され、それは絶対に遂行しなければならぬ事とされている。例えば、部屋の右隅の安全の確保という役割を与えられれば、ルームエントリの際には絶対にその方向以外に銃口を向けてはならない。重武装のテロリストが自分の左側にいたとしても振り向いてはならないのだ。相手の銃口がこちらの無防備な脇腹に照準されていて、引き金を引けば確実に致命傷となる箇所に命中するのが明白だとしても、強烈な自己保存の本能に逆らっても愚直に任務を全うしなければならぬ。だが、それは、諦観にも似た冷静さだけの御蔭ではなく、傍にいる仲間が自分の担当以外の方向にいる敵を絶対に制圧してくれるに違いないという信頼に裏打ちされているからこそである。お互いに、それをやってのけるだけの訓練をこなし、高度な技術を身につけているのを知っている。自分の役割が疎かになれば仲間は死に、それによって自分も死ぬという事も嫌というほど叩き込まれている。どちらか一方が欠ければ生存率が大幅に低下し、そして任務が失敗する確率も跳ね上がる。つまり、一蓮托生の運命であるならば自ずと強く結び付くものであり、また、過酷な体験を共有しているからこそ肉親よりも深く強固な絆が育まれるのである。それがいざ戦闘となれば、これほど強力な武器となりえるものは他にはなかった。

マイクロバスに辿り着くと、清田は銃口を擬しながら車体の周囲や下を素早く見回し、< 奴ら > の危険が無い事を確認した。

「鞠川先生、鍵をお願いします」

静香からバスの鍵を受け取り、乗降扉を開けて車内をクリアリングしてから生存者達を招き入れた。

「エンジンを何時でもかけられる状態にしておいて下さい」

静香に鍵を渡す際にそう指示し、ポケットに挟込んだ予備のスタングレネードを取り出す。エンジンを始動させる前に〈奴ら〉を遠ざけなければ、エンジン音に引き寄せられて集まった〈奴ら〉に忽ち進路を塞がれる恐れがあった。マイクロバスが普通の乗用車よりも車体と車輪が大きいとはいえ、何体もの〈奴ら〉を轢いて乗り上げれば横転する可能性がある。その為には再度、〈奴ら〉の注意を逸らして引き離す必要があった。

安全ピンを抜き、スタングレネードを校舎の方へと投擲した。数秒の後に、あの大音響が響き渡り、マイクロバスへ向かつてのろろと歩いていた〈奴ら〉の進路が反転した。周囲に群がり始めていた〈奴ら〉もバスから離れていく。

生存者達は既に清田の意図を察していた。物音を一切立てる事なく、じつと息を殺して〈奴ら〉の動向に目を懲らしている。清田は、〈奴ら〉の一体と目が合ったが、幽鬼のごとく虚ろな表情で通り過ぎるだけだった。視覚はなく、聴覚にのみ頼っているという事を頭で理解していても、薄い窓ガラス越しに遠ざかる先程のその一体が、今にも振り返るのではないかという不安に駆られ、清田もその動向から目を離す事が出来なかった。

マイクロバスの進路上と周囲から完全に〈奴ら〉の姿が消えた時点で清田は極力音を立てないように乗降扉を閉めて助手席に移動し、背負っていたデイパックと散弾銃を助手席の足元に降ろして静香の傍に寄った。

「それではエンジンをかけて下さい」

「は、はい」

清田は静香にエンジンを始動させるように指示したが、上擦った声で応じた彼女の表情は固く強張り、ハンドルを握る手には力が入りすぎていて、白魚の如き指が尚更白かった。その様子を見れば、

静香が酷く緊張しているのが手に取るように解った。

「…鞠川先生、マイクロバスの運転は初めてですか？」

清田の問いに、静香は緊張した面持ちのままこくりと頷く事で答えた。極度の緊張状態では事故を誘発する恐れがあるが、初めて運転する種車ともなれば尚更に危なっかしい。それに加えて、ハンドルを握るといふ事は、同乗者達の命をも握るといふ事でもある。今この切迫した場面で、何人も人間の命を一時的にとはいえ預からなければいけないという事実は、思った以上に静香にとって重荷だったようだ。

生存者の中では唯一の大人である静香に、己の専門とする戦闘以外で車両の運転程度ならば任せても問題はないと考えていた清田だったが、どうやらそうも言ってはいられなさそうだ。事故を起こせばそれは即、乗っている全員の生命に直結してくる。折角ここまで生き延びたのに、不慣れな静香に運転を任せただけなのに全員が死んでしまったら元も子もない。少しばかり張り詰めた神経を休めたかったが、ここは自分が運転するしかなさそうだ。

「バスは自分が運転しますが、その代わりに道案内をお願いしても宜しいですか？」

「は、はい」

清田は運転する際に邪魔になるのでスリングベルトで身体に括り付けている小銃を外し、安全装置をしつかりと掛けて助手席に置き、静香と交替して運転席に座った。腰周りに付けている装具が邪魔で座席に座りづらい上に、重装備で着膨れした姿では思った以上に運転が難しそうだ。半長靴を履いたままの運転を前提とした自衛隊車両と仕様が異なるので、タクティカルブーツを履いた足だとうつか

りペダルを踏み間違えてしまうだろう。だが、少なくとも、不慣れな静香よりはマシだ。清田は視界を少しでも広く確保する為にタクシーカールゴグルを押し上げた。

キイを捻ると、咳き込むようなセルモーターの回転音の後にエンジンが始動した。清田は全員が席に座っているのを確認してからクラッチを踏んでギアを換え、サイドブレーキを引いた。

「それでは発車します」

ゆつくりとアクセルを踏み、バスが発車する。エンジン音に釣られてく奴らゝが再度こちらに向かってきたが、その鈍足ではもはや安全な移動手段を得た生存者達に追いつく事は叶わかった。

バスは混乱の最中に開放されたままの校門を抜け、高台に立てられた学園から降る道路を走る。フロントウィンドウ越しに差し込む陽光に思わず清田は目を細めたが、視界に広がる、至る所で黒煙を吹き上げる市街地の惨たらしい惨状まで和らげる事は出来ず、暗澹たる想いが胸中を支配するばかりであった。

長閑な田園風景に囲まれた郊外の県道を、マイクロバスは生存者達を乗せて市街地を目指しひた走った。車内では誰もが口をつぐんでおり、重苦しい雰囲気だった。

学園を脱出した当初は、全員が歩く人喰い死体の巣窟から生還したという事実にあ堵しており、その喜びを噛み締めるように実感していたが、清田が少しでも現在の最新情報を得ようとスイッチを入れたカーラジオから流れる音声に、次第に生存者達の気力は奪われていった。

情報が錯綜するばかりで事実を伝える事は無く、ひたすらに混乱だけが広がっている。そもそも、被害や犠牲者の正確な全容など誰

も分かりはしない。ただ判明しているのは、歩く人喰い死体が生者を襲うという事だけである。内容のない曖昧な情報だけが繰り返されるばかりで、縋り付く事さえ出来なかった。ただ一つ、ラジオから得られた有益な情報は、現在、床主大橋・御別橋方面は対岸の床主市東部に避難する市民で大変混雑しており、これ以上の無用な混乱を避ける為に避難するのであればなるべく車両ではなく徒歩でいくようにという呼び掛けであった。

このままマイクロバスで進んでも、いずれ交通渋滞に巻き込まれて停滞を余儀なくされる。身動きが取れない状態でもしも<奴ら>に囲まれたらと想像するだけで恐ろしい。小回りの利かない図体のでかいバスを何処かで放棄し、徒歩で当初の目的地である高城邸を目指す事を視野に入れるべきだろう。そうなった場合、清田の負担はより重くなるだろうが。

あれこれと考えると、前方の道路上を農家らしき格好をした男性がふらふらと覚束ない足取りで歩いていて。生存者かと思つて一旦アクセルを緩めた清田だったが、距離が近付くにつれてその容貌が明らかとなる。体中を獣に貪られたようにして血塗れとなっている時点で、彼が既に<奴ら>の仲間入りを果たしていると見做して間違いないかった。清田は再びアクセルを踏み込んだ。

接近するマイクロバスの存在に気が付いたその一体の<奴ら>は、瞳なき目を向けたが、既に大きな車体は猛然とその脇を擦り抜けていった。清田がわざわざぶつけて車体を破損させてまで無力化する必要性もないと判断しての事だった。

今のさまよい歩く<奴ら>の一体を見て、清田は改めて危機感を募らせていた。人口がそれほど密集していない郊外とあって、田園風景が広がる景色ばかりで学園を脱出してからというもの、あの一体を見るまでは遭遇してこなかった。しかし、市街地に近付くという事は、<奴ら>が蠢き仲間を増やし続けているその渦中へ飛び込む事と同義であり、風景に建物が増えていくにつれて事故を起こして放棄されている車両なども見られるようになってきた。

「！」

清田は慌ててブレーキを床に接するほどまで深く踏み込み、車体に急制動を掛けた。前方に事故を起こしてフロントバンパーのひしやげたダンプカーと、逆さまにひっくり返っている乗用車を認めたので予め徐行してはいたが、ダンプカーの大きな車体の影から新たな乗用車が猛スピードで現れた為だった。ダンプカーの影から現れた黒塗りのセダンも急ブレーキを掛けて止まった。あわや正面衝突するところであった。

「何してんだっ、殺すぞこらあっ！」

全面スモークガラスのセダンに乗っていたのは、やはりガラが悪そうな男だった。男はホーンを鳴らしながら運転席から身を乗り出して怒鳴り付けてきた。が、清田は全く相手にする事なく、車体をバツクさせてセダンに道を譲った。暫く男は何かしら喚いていたが、やがて気が済んだのかそれともこれ以上喚くのは貴重な時間を浪費するばかりであるという事実が気が付いたのか、郊外へ向けて走り去っていた。運転席に座るのが普通の運転手ではなく、徹つい重装備の兵士であるのに気付いた様子はなかったが、それは恐らくバスのフロントに書かれた『私立藤美学園高校』の文字と、運転手まで観察する余裕が男にはなかった為だろう。バスのフロントの文字だけを見て男は、運転席に座るのも学校職員のオヤジだろうという先入観を持って決め付けていた。しかし仮に、清田の存在に気が付いたとしても保護を求めるといった発想に到る事は無かっただろう。まさか、自衛隊員が部活遠征用のマイクロバスを運転してこの場にいるとは思えない。戦闘服姿の清田を一目見た所で、頭のいかれた軍事オタクと見做し、わざわざ関わりを持つとはしないだろう。再びバスを走らせながら、清田は暫し物思いに耽った。先程の、

自分達以外の<生きている>人間に出会ったからこそ思い起こされた。

何も障害となるのは<奴ら>ばかりではないという可能性だ。<奴ら>の危険性については既に嫌というほど思い知らされている。だが、死の危機に瀕して自暴自棄になった人間や、生き残る為であれば躊躇なく犯罪に手を染める人間もまた危険である。政府機能が麻痺するほどの混乱ともなれば警察の治安維持能力の許容量キャパシテイをあっという間に超えてしまい、どさくさに紛れての暴動や掠奪が横行するかもしれない。幾度となく大災害に見舞われた経験のある日本では、表立って大規模な暴動が発生したと報じられた事例は少ない。その理由が、日本人という全体の和を優先する島国民族の特有の精神的社会主義によるものだとか言われるが、最も重要なのは昔から天災に慣れ親しんできたからこそその高い災害対策能力があるからだ。一般的な先進国の、普通の市民とて自ら進んで積極的に法を犯そうとは思わないだろう。そうせざるをえないのは、安定した食料と水の配給がなされず、生きていくにはやむを得ないと判断するからだ。中には火事場泥棒目的の不心得者もいるだろうが、大多数の善良な市民はこうだ。自分達の命が政府によって保証されているのであれば、犯罪を犯す必要などある筈がない。全国的にほぼ同時に発生した殺人病の蔓延は、日本の災害対策能力や治安維持能力の上限を一気に超えてしまっているから、ここまでの騒動に発展しているのだ。もしも初期段階で押さえ込まれていれば、自衛隊が出動する必要性など絶対に無かっただろう。

市街地に行けばまだ逃げる事の叶わない大勢の市民がいる。彼等の誰もが生き残る為に必死の筈だ。その彼等と出会い、清田の存在と身分に気がつけば、善悪に関わらずその意志の矛先が向けられるだろう。その時、一体どうすればいいのか。任務は高城沙耶の安全が第一だ。しかし、果たしてそういった状況に直面すれば任務どころの話ではなくなるかもしれない。

清田はそつとレッグホルスターに収めてある拳銃に触れた。守る

べき国民に対して銃を向けざるを得ない状況が生起するかもしれない可能性は充分にあるだろう。だが、その時、自分は非情に徹する事が出来るのだろうか。今、この場で答えを出すのは躊躇われた。

物思いに耽りながら運転していた為か、いつの間にか頭上より降り注ぐ爆音に気が付いたのは、視界の隅を低空で掠め飛ぶヘリコプターの機影を認識してからだだった。残念ながら自衛隊のものではなく、民間の報道ヘリだった。もしも自衛隊機であれば、携行しているTACBE戦術ビーコン発信機兼無線機で連絡する事が出来ただろう。TACBEは、上空なら付近まで飛んできた捜索機や救助ヘリと、地上ならごく近距離であれば無線通信で会話もできる。

その報道ヘリは不安定な飛行を行っていた。理由は直ぐに分かった。ヘリのスキッドに、数体の<奴ら>が鈴なりになってぶら下がっていた。恐らく、取材する最中、押し寄せる<奴ら>の群れに飲み込まれる直前になんとか離陸したのだろう。相当焦っていたらしく、レポーターらしき女性はキャビンに乗り込めなかったようで、乗降扉に懸命にしがみつくと事で堪えていた。

「……………！！」

その瞬間を目撃したのは、フロントウィンドウ越しに広い視界を得られる、運転席と助手席に座る清田と静香のみであった。<奴ら>の一体が、女性の足に食らい付いた。それからはあつという間の出来事であった。相当の激痛に、思わず扉を掴む手が緩んでしまったのだろう。女性は、<奴ら>と共にヘリから落下した。低空を飛んでいるとはいえ、あの高さから落下すればまず助からないだろう。仮に助かったとしても重傷は免れず、また、その状態で僅かばかり生き長らえてもそれは地獄でしかない。静香はその衝撃的な光景に、反射的に手で顔を覆って遮ったが、一部始終は網膜を通して深く脳裏に刻み込まれていた。遠目だからこそ細部は不鮮明だが、それを補うかのように女性の恐怖と絶望に歪んでいたであろう表情を想像

してしまい、ただただ細い肩を震わせて戦慄するばかりであった。清田も、流石に心地好いものではなかった。

ちらり、と清田は横目で助手席に座る静香を見遣った。傍から見ても気の毒と思えるほど彼女は怯え、憔悴しきっていた。車を何処かに停め、少しでもいいから休ませるべきだろう。でなければいずれ、積み重なった心労で床主市からの脱出を待たずに彼女は駄目になってしまう。

前方に、新たに衝突事故を起こしてそのまま放棄されている二台の乗用車が見えた。丁度、右側車線の路肩部にも利敷きの駐車場が確認できた。清田はそこへバスを乗り入れ、エンジンを切って停車させた。エンジンを切ったのは、音を少しでも抑えてく奴らに捕捉されないようにという創意であった。

「ここで暫く休憩します。何かあれば、遠慮なく自分に言ってください」

そう言うってから席を立ち、傍らの静香に寄る。彼女は俯いており、その表情は垂れる下がる長い髪に隠れてしまっただけに見える。

「大丈夫ですか？」

なるべく優しく、穏やかな声で何うが、静香は反応を示さなかった。暫し、根気強く反応を待っていると、彼女は顔を上げ、今にも泣き出しそうな潤んだ瞳で清田を見た。

「辛いのは解りますが、今は耐えてください」

気の利いた優しい言葉を掛けてやれない自分に腹が立った。辛いのは全員同じだ。そんな簡単な事ぐらい、静香は百も承知だろう。しかし、だからといって、折り合いをつけて向き合えるかどうかは

別だ。心の強度には個人差がある。それを無視する訳にはいかないだろう。

「自分が、全力で皆さんをお守りしますから、どうか信じてください」

静香は弱々しく、こくり、と頷いた。その様子があまりにも痛ましくて、清田は胸を締め付けられるような想いに駆られた。同時に己の無力さを思い知らされた。重装備で固めた自分の厳つい姿が、少しも安心感を齎さない事に。

「トイレは大丈夫ですか？ 我慢しないでくださいね」

「……………少し」

沈黙の後に静香はぽつりと答えた。気分が酷く落ち込んでいても、人体の生理的欲求に変化はない様子だ。

「解りました。少し、待っていて下さい」

清田は小銃を掴んで立ち上がると他の生存者達に、用を足したい者がいるかどうかを念入りに尋ねたが、静香だけのようであった。

「それでは、自分の後を付いてきて下さい。先ず自分が外に出て安全を確認しますので、合図があるまで車内で待機してして下さい」

静香はハンドバッグから取り出したポケットティッシュを手には、清田の先導に従った。

慎重に乗降扉を開け、清田は先に車外に降り立った。少なからぬ安全が確保されていた車内と違い、外は<奴ら>の蠢く世界である

事を意識せざるを得ず、自然と緊張感が高まった。油断なく周囲に視線を巡らせ、警戒しながら県道まで進む。近辺に〈奴ら〉の姿がない事を十分に確認してから、次に放棄されたままの二台の事故車両の傍まで歩いていく。二台とも車内に人影はなく、周辺の道路に血痕があるだけだ。〈奴ら〉の姿は完全に見当たらないと判断し、車内から様子を窺っていた静香に合図を送った。

静香は恐る恐る車外に降り立つと、おっかなびっくりしながら小走りで清田の傍まで駆け寄り、その大きな背に隠れるようにしてぴたりと寄り添った。抗弾ベストの背中には、焼結加工された分厚い積層セラミック装甲が挿入されているが、清田には身体を寄せる静香の鼓動と体温を感じ取れるような気がした。今の彼女は、大人の女の魅力をたっぷり漂わせる保健の先生というよりも、父親の力強い庇護を求めるか弱い少女のようであった。自然と、清田の胸中には、この小鳥のように小さく弱々しい鼓動を絶対に守らねばならない、という気持ちが始りこった。

「鞠川先生。自分が周囲を見張っていますので、その間に奥の乗用車の陰で用を足して頂けませんか？」

全く周囲から遮蔽されていないから用を足す静香にとっては恥づかしい事この上ないだろうが、周辺の見晴らしを確保するには殆ど道路のご真ん中である以外に方法はない。駐車場の直ぐ傍は雑木林となっており、用を足すのであれば生い茂る草木で十分なプライバシーを保てるが、それと引き換えに視界を犠牲にしてしまうので接近する脅威の発見が遅れてしまう。しかし、開けた道路上であればその心配はない。

今更、恥づかしいだの何だの言うてはいられない。一時の羞恥を我慢するのと、ほんの僅かとはいえ命の危険を高めるのではどちらがマシか。改めて尋ねるまでもないだろう。清田とて心苦しさを感じているが、今は個人のプライバシー保護よりも優先すべき事が

あるというのを理解してもらわねばなるまい。

一瞬、躊躇った静香だが、即座に清田の言わんとする事を察し、そそくさと乗用車の陰に隠れた。

「…あの、すみません」

しかし隠れたと思った静香は用を足さず、直ぐに小声で清田を呼んだ。

「どうしました？」

静香に呼ばれた清田は、若干怪訝に思いながら傍までやってきた。まさか、流石に恥ずかしいので用を足すのは躊躇われた、という事ではあるまい。たとえそうだとしても、一切の譲歩をするつもりは清田には無かった。

静香はばつが悪そうに、というよりも、親の顔色を伺う子供のようにはにかんだ表情を浮かべていた。何かを伝えたいが、言いづらいつらいつらとところどころだろうか。しかし、何時までもそうして躊躇っている事は叶わず、静香は太股をぴっちり擦り合わせるようにもじもじとさせ、迫り来る尿意に堪えながら言った。

「自分の目の届く所にいてくれませんか？」

気恥ずかしそうにか細く小さな声で搾り出された静香の言葉を、清田はきよとんとした様子で受け止めていた。何故、という疑問が彼の瞳に浮かんでいるので、静香はぼそぼそと呟いた。

「一人でいると…不安で堪らなくて……その……」

最後の方は聞き取れなかった。静香は、用を足す僅かな間でも、

視界内に清田の姿を収めていないと不安で仕方がないというのだ。大の大人が何を言っているんだ、と清田は思わなかった。いや、思える筈が無かった。静香は女性で、自分のように体格と体力にも恵まれてもいなければ、特別な訓練など何も受けていない素人なのだ。立て続けに起こる惨劇が齎す恐怖で、その精神の自律性が退行を起こすのも仕方がない事だろう。むしろ、酷く怯える彼女の一助になるのであればお安いご用だった。

「解りました。では、鞠川先生から見える所に立っていますので、安心して下さい」

清田は周囲一体を隈なく見渡し、市街地方面へ伸びる道路上に＜奴ら＞の姿がない事を確認し、静香から少し離れてバスを今まで走らせてきた道路の方角を向いた。流石に、静香にそう頼まれたからといって彼女が用を足す場面を直視する訳にもいかないのだ、彼女に背を向け、道路の一方を監視しながら行為が済むのを待つ事にした。ほんの数メートル離れた場所で背を向けて佇む清田の姿がなんとも心強く思え、それで漸く安心感を得られたからか、今まで堪えてきた尿意が一気に噴出するように押し寄せてきたので、静香は慌てた。

お気に入りだった、ブラダの膝丈の黒いタイトスカートは下着が露出するほどまで冴子によって引き裂かれており、捲り上げるのに大した苦労はいらなかった。これが普段であれば、スカートが腰のくびれからふつくらと突き出た円やかなヒップに支えてしまうのだが、今は腰に纏わり付くだけの布切れとなっているのですんなりといった。

ふくよかな腰のくびれに食い込んでいるパンティのウエスト・バンドに指を滑り込ませ、豊かな曲線に沿って下ろすと、今まで薄布によって隠されていた秘めやかな場所が外気に晒される。そうしてその場にしゃがんでから、静香は今更になって自分がとてつもなく

恥ずかしい行為をしているという事実には気が付き、顔を赤らめた。

視線の先には、背を向けた清田が強固に聳え立つ城壁のように静かに佇んでいる。身に付けた装備によって着膨れして普段よりも広く、厚い背中からは頼もしさを感じた。もしも彼がこちらを振り向いたりでもしたら、惜し気もなく晒されている自分の秘所を真正面から見る形となる。そうなたらたとえようのない羞恥に苛まれるかもしれないが、今更その程度の事を恥と感じたからなんだというのだ。今は生き死にが掛かっている状況だ。だからこそ、用を足す無防備な瞬間が堪らなく怖くて、恥を忍んで彼に目に見える場所にいてくれと頼んだ。

しかし、やはりそれとこれとは別問題であり、恥ずかしい事に変わりはないのだが、もしも清田に今の恰好を見られたとしても、静香は大した嫌悪感を抱かないつもりだった。彼は全てにおいて自分を優先してくれている。幾らそういつた訓練を受けているからといって、このような状況下で他者を気遣って行動するのは大変だろう。それを少しも雰囲気に出さない清田の強さには頭が下がるばかりだ。感謝こそすれ、彼を疎ましく思える筈が無かった。

あれやこれやと思索に耽っていた静香であったが、ほんの束の間、忘却していた生理的欲求によって直ぐにそれまでの全てが吹き飛んでしまった。

気付いた時には既に始まっていた。まさに防波堤が決壊するが如くの勢いであった。ちよろちよろと綺麗な弧を描いて放射されるその透き通った淡黄色の飛沫は、医学用語ではハルンと呼ばれており、その成分は殆どが水分で、タンパク質の代謝で生じた尿素を僅かに含み、その他には微量の塩素、ナトリウム、カリウム、マグネシウム、リン酸などのイオン、クレアチニン、尿酸、アンモニア、ホルモンを含有している。＜奴ら＞から逃れる為に学園内を走り回るといふ激しい運動を行った為に蛋白質を普段よりも多く含んでいるから、目の前のアスファルトを小さなせらぎとなって流れていくその液体の色は普段よりも黄色味が強く、臭いも少しきつい。勢いよ

く放出される為にアスファルトに打ち付けられる水音がやけに大きく聞こえ、恐らく、それは少し離れた場所で見張りに立っている清田の耳にもしつかりと届いているだろう。静香は顔を俯かせて耳を真っ赤に染め、なんとかして勢いを制御しようと下腹部に力を込めたが、弱める事は出来なかった。膀胱を制御する二つの括約筋はそれぞれが随意筋と不随意筋であり、ある程度までなら我慢が可能だが、膀胱の内圧が許容値を超えているのであれば最早人の意志ではどうやっても抗う事は不可能である。人によっては女性でも男性と同様に膀胱の制御が可能であるが、残念ながら静香はそうではない。黄褐色の小さなせせらぎは、彼女の努力も虚しく、その目の前を緩やかに流れていった。

止まらぬ自身の小水の流れを茫然と見詰める静香は、羞恥の余り頭の中が真っ白になっていくのが分かった。しかし、その一方で、心の片隅では邪な、というよりも、悪戯めいた妄想が鎌首を擡げ始めていた。もし、今のこの恥ずかしくあられもない姿を清田が振り向いて見たら、一体彼はどのような反応を示すのだろうか。目出し帽から僅かに覗く、大人しい大型犬のように穏やかな瞳を驚愕に見開くのか、それとも時折見せる爬虫類のように何の感情も表さない眼差しで見詰めるのか。もしそうなら、前者のような反応であればいいのに、と静香は密かに願った。泰然としている清田が顔を俯かせ、狼狽している姿を見たいと思った。その姿を見たらきつと、彼も何かしら弱みを持った人間であると思え、もつとその存在を身近に感じられるだろう。今の彼は、静香からすれば、映画のスクリーンから抜け出してきた神秘的な戦士にしか思えなかった。つまりは、彼の俗っぽい一面を垣間見て、彼がターミネーターなどではないという確証を得たかったのだ。でなければ、何事にも動じない彼を頼もしく思う反面、得体の知れない化け物のように見做してしまう自分の心の働きが怖かった。だからだろうか、物思いに捕われていた静香は、依然として自身から流れ出ている液体の存在をすっかりと忘れていた。

静香が用を足している場所は若干傾斜しており、それは警戒を行っている清田に向かつて低くなっていた。液体は、高所から低所へと流れていくものである。その事象はこの宇宙に於ける永久不変の物理法則であり、それは此処、日本国は床主市でも同様である。静香がそれに気付いた時には既に手遅れであり、清田の背後に迫っていた。

清田は清田で警戒に集中しようとしていたが、数メートルも離れていない場所で静香が用を足している水音がやはり気になってしまい、そわそわしながら小銃のスリングを弄っていた。集中しろ、と自らに言い聞かせても意識が散ってしまう。あれだけの美人が、自分を信じて用を足しているのだ。ならば男として、か弱い女性から寄せられた信頼には全身全霊を以って報いなければなるまい。止むに止まれぬ状況が生起しない限り、何があっても絶対に静香が用を足し終えるまで振り向いてはならないと心に固く誓った。

そう決意してから何気なく足元に一瞬だけ清田が目を落とすと、いつの間にか地面には何処からか液体が流れてきており、タクティカルブーツの靴底を濡らしていた。一体何の液体だ、と脳裏に疑問を浮かべた直後、液体から立ち上る微かな刺激臭がフェイスマスク越しに鼻腔を衝いた。

その瞬間、清田は全てを察した。恐らく、背後の静香は、気の毒なほど羞恥に身を焦がしているだろう。ならば男として取る行動はただ一つだけだ。何も見なかった、何も感じなかったように振る舞うのみだ。

そう心得て清田が顔を上げた直後、クラクションの音と共にそれは目に飛び込んできた。

一台の大型バスが、県道を遡ってこちらに向かつて来る。難を逃れた生存者かと思っただが、それにしてもどうも様子がおかしい。バスは蛇行を繰り返し、危なっかしい走行で唸りを上げて道路を遡上して来る。小銃に据え付けられている低倍率のACOGサイトを通して確認すると、その理由が直ぐに解った。

既にバスの中は地獄絵図だった。＜奴ら＞に噛まれた者が乗り込んでいたのだろう。瞬く間に発症し、＜奴ら＞となって他の乗客に襲い掛かったのだ。逃げ場のない狭いバスの車内が凄惨な殺戮場へと変貌するのにそう時間は掛からなかっただろう。とうとう、運転席に辿り着いた＜奴ら＞の一体が、懸命にハンドルを操作する運転手の柔らかい首筋にむしゃぶりつくと同時に、清田は行動していた。振り返れば静香と目がばったり合った。清田が振り返ると静香が用は足し終えるのはほぼ同時であり、彼女はまだしゃがんだ体勢のままだった。一拍遅れて、静香が驚きと羞恥の余り、咄嗟に清田に自身の恥ずかしい場所を見られまいと手で隠していた。清田がもしも振り返ったらどのような反応を示すのだろう、と先程までそのような妄想に耽っていた静香であったが、いざ実際にそうなる露にも思わず、やはり恥ずかしさが勝ってそのような反応を取らざるを得なかった。

そして当の清田は、恥ずかしがるでも無表情でもなく、切羽詰まった恐ろしい表情に転じ、大股で駆け寄り、静香のその手を少し乱暴に掴んで強引に立ち上がらせた。

「な、何を…」

驚愕と羞恥と、そして突然の清田の行動に混乱と少しばかりの恐怖を感じていた静香は辛うじて口を開いたが、今の彼には彼女の相手をする余裕が無かった。

静香の手を引いて清田は駆け出した。しかし、彼女はもたつくばかりで遅々として前に進まなかった。それは仕方が無かった。有無を言わず清田に腕を掴まれて立ち上がらせられた静香には、滑り下ろしたパンティを穿き直す余裕など無かったのだから。用を足す際に膝まで滑り下ろしたパンティは、今となっては足首近くまでずり落ちてまるで枷のようになっていて。これでは走るのは元より、歩くのもままならない。

最早、清田はなりふり構っていられなかった。静香を強引に抱き寄せると軽々と抱え上げ、脱兎の如く駆け出した。既に猛然と走るバスが後背に迫っていた。

バスが放置されていた二台の乗用車を乗り上げるようにして木の葉の如く蹴散らし、その際にバランスを崩して盛大に横転すると同時に、清田は静香に覆い被さって地面に臥せていた。巨大な鉄の塊同士が衝突する、金属が引き裂かれる大絶叫の最中を蹴散らされた乗用車の一台が勢いよく宙を舞い、臥せる直前まで清田の上半身があつた空間を通過していく。もしも清田が臥せるのがあと少し遅ければ、飛来する乗用車が二人を直撃して原形を留めぬほど破壊していただろう。そのまま乗用車は吹っ飛び、着地しても尚転がっていた。そうして止めとばかりに、横転したバスのエンジンから一気に炎が吹き上がり、瞬く間にガソリンに引火して大爆発を起こした。爆風と熱風が、静香に覆い被さる清田の背を掠めるようにして広がる。

間近で起こった爆発により、清田の頭の中ではまるで鐘が鳴り響いているようだった。三半器官が上手く機能していない。耳もよく聞こえなかったが、なんとか手足を踏ん張って起き上がるうとしたが、産まれたばかりの子馬のように力が入らなくて、何度か失敗しながら漸く上半身を起こし、静香の上から退いた。彼女は気を失っているのか、目を閉じていた。

「大丈夫ですか?!」

そう確かに叫んだ筈だが、自分の声がまるで聞こえなかった。それは静香も同様なのだろう。静香を抱き起こし、何度も呼び掛けを続けていると自分の声が戻ってきた。聴覚が回復してきたのだ。

「う…」

か細い呻きを漏らして、静香は臉をゆっくりと開いた。焦点の定まらぬぼんやりとした目で清田の顔を暫し見詰める。一体何が起こったのか全く理解していない様子だ。

「バスが事故を起こしたんです。あのまま逃げるのが遅れていれば、今頃我々はあそこで丸焦げでした」

抱き起こした静香に、先程まで乗用車が停まっていた場所を見せる。そこは既に黒煙を吹き上げながら燃え盛る紅蓮の業火に包まれていた。

「大丈夫ですか？ 何処か怪我はしていませんか？」

静香の肩を抱きながら一緒に立ち上がる。まだ足元が覚束ないらしく、清田にしがみついていると立ってない様子だが、ざっと確認した所、彼女は細かい擦り傷程度しか負っていないかった。不幸中の幸いといえいいのか。とにかく、静香が無事な事に清田は胸を撫で下ろした。

「でも…これじゃ……」

目の前で赤黒く燃える炎を見て、静香が力無くぼつりと呟いた。暴走したバスは、丁度、二人とマイクロバスに残った生徒達を分断するように横転して爆発し、広範囲に渡って火の手を上げていた。これでは合流するのは難しいだろう。

「田中さん！ 鞠川校医！ 大事ありませんか！？」

今まで様子を窺っていた冴子が、状況が落ち着いたと判断するや否やマイクロバスを降り、炎から垣間見える二人に向かって声を張

り上げた。

「二人とも無事です！ 何も心配はありません！」

呼び掛けに答えた清田の声に冴子は安堵した。が、それも束の間
の事であった。

紅蓮の炎の中で人影が揺らめいたかと思えば、バスの残骸の中か
ら元々は乗客だった奴ら>が、その身を灼熱に焼かれながらも貪
欲に生者の血肉を求めて這い擦り出て来た。それはさながら、地獄
の炎からこの世に出でる亡者そのものであった。初めて間近で嗅ぐ
人肉の焼ける臭いに流石の冴子も気圧された。それはポリエテル
などの化学繊維と一緒に焼かれる豚肉のような臭いだった。

しかし一流の武者としての鍛練の賜物ゆえか、直ぐに冴子は立
ち直ると、火達磨になりながら迫ってきた奴ら>の一体の胸を木
刀で突き、体勢を崩してから一旦退いた。状況に最早予断は許され
ない。早急にこの場から離脱しなければならなかった。目の前の、
火達磨になった奴ら>だけではなく、爆発音によって他の<奴ら
>もいずれ引き寄せられて来るだろう。

「……………床主城付近で落ち合いますよう！」

清田は咄嗟に床主城の名を口にしていた。床主市の地理に疎い清
田ではあったが、バスを走らせる道の途中に、床主市の観光名所
ある床主城への案内をする看板を見付けており、それならば著名な
地形地物であるから、目印にしやすいと見越しての事だった。もっ
と他に、集合場所を消防署や警察署を指定するべきだったかもしれ
ないが、どちらも助けを求める市民が殺到しているだろうから、そ
の混乱の渦中に飛び込むのは危険と判断したからだ。

「時間は!？」

了解の言葉の代わりに、冴子はそう応えた。

「今日の午後五時に！ 今日が駄目ならまた明日の同じ時間に！」

それ以上の会話を続けるのは不可能であつた。飛び散つた火が、蹴散らした乗用車の燃料タンクを燃え上がらせ、再度大きな爆発を生じさせたからだ。火勢が増し、熱波に思わず清田は顔を背けた。

「鞠川先生！ もう駄目だ！ 移動します！」

茫然自失としていた静香の腕を掴み、清田は駆け出した。清田に腕を引かれる静香はもう足をもつらせる事は無かつた。辛うじて足首に引つ掛かつていたパンティは、この混乱の中でいつの間にか脱げ落ち、何処かについてしまつていたからだ。だが今は、そんな事にも気が付かず、静香は夢中になつて走つた。

最早スカートのを成していない布切れを充実した腰周りに纏わり付かせて走る静香の姿は煽情的ですらあつた。両脚を忙しく交互に動かす度に、クリーム色のむっちりとした太股の肉が跳ねる。ボタンの幾つか外れたブラウスが、胸元の見事な膨らみにびつたりと張り付いて踊り、それと競争するかのようには、腰のくびれからふつくと突き出た白く円やかなヒップが、破れたスカートから時折あらわになりながら悩ましく揺れ動いた。それはとても素晴らしい眺めだつたかもしれないが、彼女の手を引く清田はこれからの事で頭が一杯だつた。

#1st day? (後書き)

変態ですみません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4097x/>

Dying Lion x Highschool Of The Dead

2012年1月6日19時48分発行